

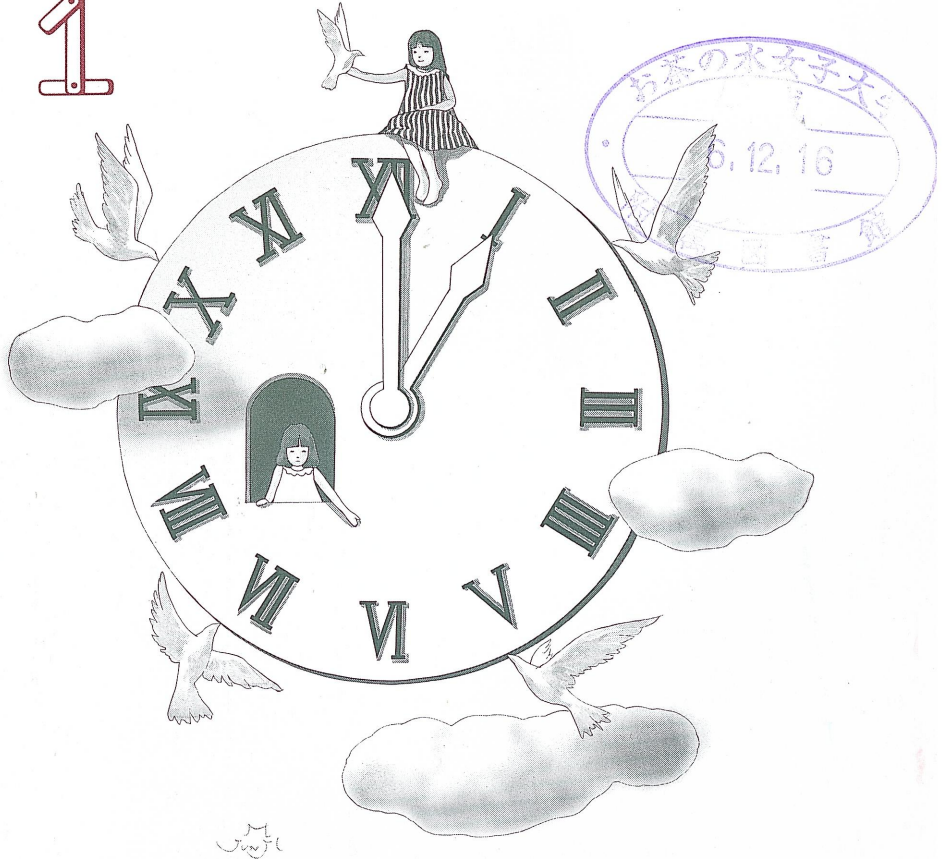
N24
1
94[1]

家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

1995

1



第94巻 第1号 日本幼稚園協会

リズム保育12か月

—手あそび・ゲーム・オペレッタ—

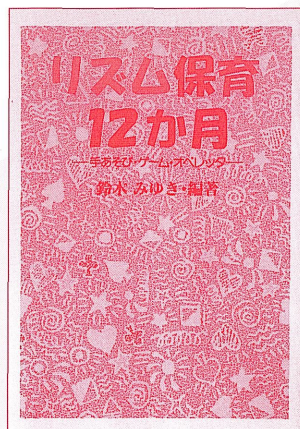
鈴木みゆき
編著



保育をパワーアップ
行事からオペレッタまで
CD 5巻に総編集

- CD 5巻セット(解説書付) セット定価12,500円(本体12,136円)
- 解説書(B5判 216頁) 定価 2,500円(本体 2,427円)

- ・日常保育、行事にすぐ活用できる画期的リズム保育資料
- ・CD 5巻と解説書(1巻)をセット。解説書には日々の保育を演出する際のヒントとアイデアを4月から月ごとに月案、日案、楽譜、活動例で構成。
- ・行事に役立つあそびやゲーム、オペレッタには、楽譜はもちろん振りつけを分かりやすく図解。初心者からベテランまですべての保育者を対象。
- ・CDの音源はすべて音楽性豊かなフルオーケストラを使用。
- ・CD 5巻は年間のすべての保育に役立つよう104曲を厳選。
- ・誰でも知っている曲、新しく発表した曲、新曲のオペレッタ(お話はよく知られた童話)など盛りだくさんの内容。

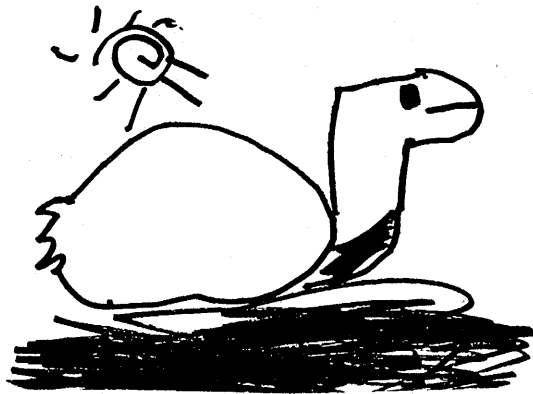


くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。

キンダーブックの
フレーベル館

幼児の教育

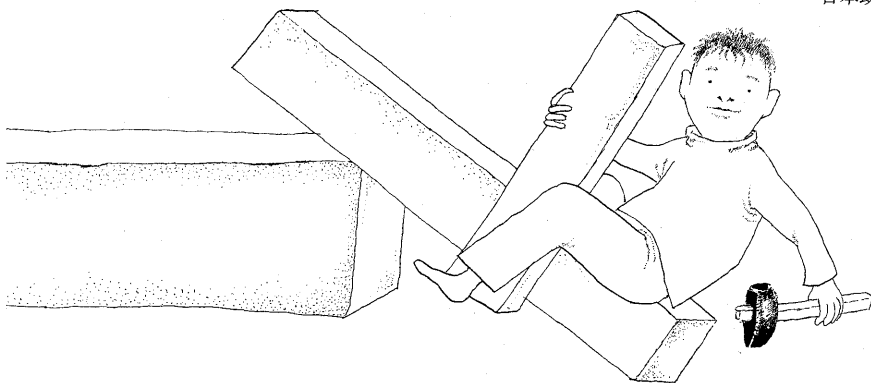
第94卷 第1号



幼 児 の 教 育 目 次
 — 第九十四卷 第一号 —

ある日　　＼ヤン君のこと	津守　　真	(4)
あそびの研究(4)		
シルクロードの子どもの遊び	藤本浩之輔	(8)
保育、遊び、散歩	加用　　文男	(18)
松本のお正月　　＼「飴市」と「三九郎」	美谷島いく子	(26)
年のはじめに	岩上　　節子	(35)

© 1995
 日本幼稚園協会



お正月さんがやってくる(2).....はる・みつ.....(40)

黄遵憲がとらえた明治の子ども.....首藤美香子.....(44)

ある日の育児日記から(49).....佐藤 和代.....(54)

子育てにおける夫婦の連携(5)

お父さんの子育て.....田野 直.....(55)

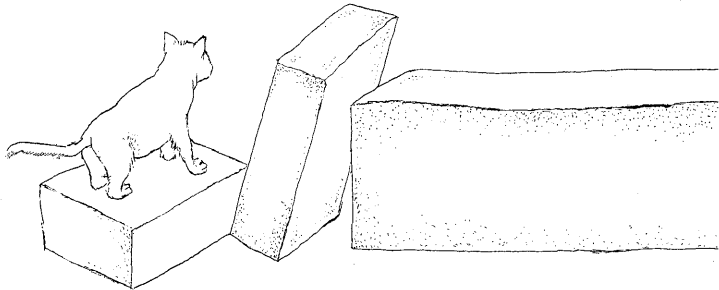
表紙・松永 潤二／扉題字・津守 真
扉カット・お茶の水女子大学附属幼稚園園児

カット・彌永たたえ

編集委員・本田 和子／田代 和美

榊田 正子・田中三保子

編集部・大沢 啓子



ある日

ヤン君のこと

津守 真

九月半ば過ぎ、急に涼しくなったころ、昼近

くから雨が降り、あたりが急に暗くなった。Y子がトランポリンの上でハーモニカを吹いていた。一緒にいた子どもが手を出し、Y子が手渡した。その子はハーモニカを放り、それが運悪くY子の頭にあたって、Y子は大泣きした。私はいろいろに慰めたが、いつもだとじきに泣き止むのに、今日は泣き止まない。私に抱かれて階段を上がりながらも泣いている。泣きじゃくりながら大好きな歌をうたい、長い間泣いてい

た。

この日は、皆がよく泣いた。学校の中でいつもだれかの泣き声が聞こえていた。

雨の止み間にA雄が裸で庭の水たまりの中を歩いていった。私が急いで傍らにゆくと、私の手を引いてあちこち歩き回った。そして、落ちていたホースを蛇口につけて欲しかった。私がホースをつなげ、A雄は水道栓をひねったら冷たい水が出た。A雄は急に激しく泣いた。お湯が出なかったからかと思ひ、ホースをお湯の水

道栓につなげようとしたが、うまくいかなくて A 雄は更にはげしく泣いた。私の背中におぶわられても、泣き止まない。あまり泣きつづけたので、担任が傍らにきた。

A 雄が私の背中からおりると、すぐに Y 子がまた私に何度も抱っこされたがった。最近はこのなことは珍しい。抱いているうちに眠ってしまった。じきに目を覚まし、私の顔を見て、にっこり笑い、また抱っこされたがった。その笑顔にじきにほだされてしまう。この日、子どもたちが帰ったあと、ホールの床に、若い職員までみんな座りこんでいた。

この日の夕方、私は小学校時代のクラス会に出かけた。同級生にヤン君というオランダ人がいて、卒業してから五十六年ぶりに日本にきたので、泊まりがけで話し合うことにしたのだった。長い間音信不通だったこの友人に、同級生

のひとりが偶然英国の国際学会で出会い、それがきっかけで、日本の大学に招かれることになった。現在はカナダの大学で生理学の教授をしている。第二次世界大戦をはさんで半世紀以上をへだて再開することができた不思議に私共は興奮した。

彼が東京に来て最初に行きたかったのは、宮城で、それから楠木正成の銅像と泉岳寺、それから相撲見物だった。いずれも、小学校時代、遠足や見学で行った私共に共通の懐かしい場所である。忠臣蔵は彼が一番好きな講談であり、そのことから、関ヶ原の戦いは大坂冬の陣か、夏の陣かということにまで話は及んだ。私共の小学校の担任の小原先生が講談好きで、弁当の時間に私共は講談を話してもらうのが楽しみだった。私共がねだると国語の時間はしばしば講談にかわった。小学校時代がこんなに影響力をもっていることに私共はあらためて驚いた。

彼が友達だったために私共は青い目の外国人を恐れなかったし、彼は自分を異国人だと思つたことがなかったと語つた。

私の個人的記憶では、彼は私の左後ろの窓際の席にいた。ヤン君の記憶力は抜群で、はじめは廊下側の出入り口に近い席だった。修身のS先生の時間に、「朕惟オノミフニ 我カ皇祖皇宗國ヲ肇シムルコト宏遠ニ 徳ヲ樹ツルコト深遠ナリ。我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ……」と（ヤン君はそれを暗唱した）教育勅語が始まると、廊下に逃げ出した。それで窓際の席に移されたとのことだった。私はそんな話を聞くのははじめてだった。

一九三八年、昭和十二年に小学校を卒業したヤン君は、インドネシアを経由してオランダに帰つた。ヤン君の父親は東洋学を専攻し、オランダ大使館の書記官をしていたが、ヨーロッパの大戦勃発とともにオランダに単身で帰国し、

一年後、ナチ軍オランダ侵攻のとき爆弾にあたって戦死した。彼にとつては小学校時代が家族と一緒に過ごした最後の時期だった。そのことが、小学校時代を一層懐かしい記憶としているのだろう。

半世紀以上たつても、彼の日本語は生きていた。彼は、オランダに帰るとき、十五巻の講談全集を持ち帰り、以来、五年毎にそれを読み返しているという。あの頃の日本語は読めるが今の本はだめだという。體操なら読めるが、體操だと読めない。

ヤン君と話しているとき、次第に話は教育と学問に及んだ。理学部との境界領域の基礎生理学を専攻しているヤン君は、現代は教育が普及し、知識の水準は上がったが、教育も学問も高尙高尚さ（nobility）を失つた、何かのためではない、知のよろこびのために知を追究することをしなくなつたと言う。私は、人間の実践の仕事

からも高尚さが失われつつあることを考えた。

話しているうちに、ヤン君自身の専門が人間の体温の基礎生理学であることが分かった。人間には体温を一定に保つコントロール機能が備わっているという考えがあるが、それに対して、彼は、体温は、気温や気候など、環境と微妙に関連していると考ええる。そこで、私は、この日、低気圧が近づいて、急に雨が降り、子どもたちが一寸したことで泣いて、泣き止まなかったことを話した。ヤン君はそのことに非常に興味をもった。そういうときは、衣服をとって裸にし、ぬるま湯を背中からかけるといいのだそうである。冷たい水ではいけない、ぬるま湯だと強調した。私共は生理学の観点から考えたことはなかったが、子どもを見てみるとそれ

が必要に思えて、知らずしてそのようにしていた。その日泣き止まなかったAくんにもそのままあてはまる。

その翌日、午後の飛行機で帰るというのに、午前中、同じ同級生のSさんの車で送られて、ヤン君は私の学校を訪ねてくれた。言葉少なに一緒に過ごした短い時間に、ひとりひとり違う子どもたちを教育するのはどうやって可能になるかと彼は言った。もはや十分に議論する暇もなく、彼の考えをそれ以上聞くこともできなかったが、私は、私共の小学校時代を思った。勉強も、図工も、體操も、先生が私共と一緒にやって下さった記憶がたくさんある、小さな私立小学校だった。

(愛育養護学校)

あそびの研究 (4)

シルクロードのキジモの遊び

藤本 浩之輔

今から六年程前、京滋の大学生の間で、バイクを駆ってタクラマカン砂漠に埋没した幻の王国楼蘭に行ってみたいという計画が持ちあがった。楼蘭ブームの時期である。

調査方法や資金面で学生たちの相談ののっているうちに、同行する責任者が見つからず、結局私がそれを引き受けることになった。そこで、私の研究室の院生や中国からの留学生を調査担当として加え、「シルクロード友好親善隊」を組織したのであった。

シルクロードの起点長安（現在の西安）から出発したかったのだが、許可がおりず、甘肅省蘭州からの出発となった。蘭州で中国側の支援隊を加え、一九八九年三月二十二日出発。行程は約一か月であった。バイク隊と調査隊は、敦煌までの河西回廊を同道。

その後、バイク隊は、敦煌から青海省に南下し、北上して楼蘭に入り、タクラマカン砂漠を縦断してウルムチに至るといふ計画であった。ぎりぎりまで交渉を続けたが、結局楼蘭入りは許可されなかったため、バイク隊の

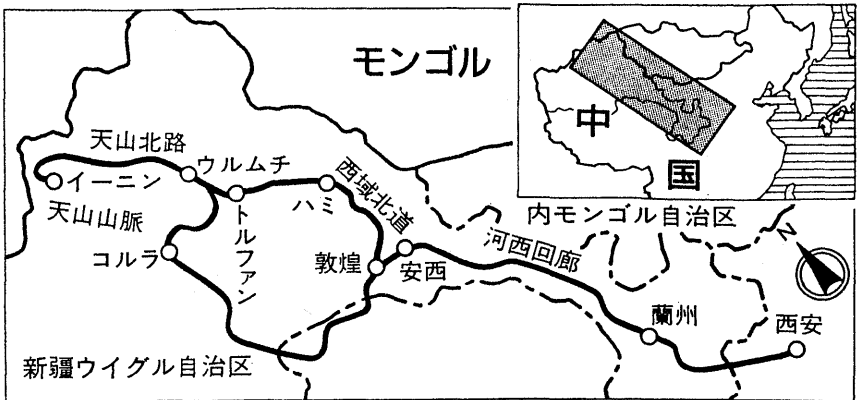
四名は、ローマまでシルクロードを完走することになった。

私たちの調査隊は、敦煌出発後、ハミ、トルファン、コルラ、ウルムチを経て、ソ連との国境イーニンに至り、引き返してウルムチでバイク隊と再会、そこで解散式という計画であった。調査隊の走行距離は三千キロに達した。

四月といっても、砂漠地帯の気温は、昼間は二十度程度まで上がるものの、夜はマイナス十度ぐらいまで下り、大きな落差があった。

河西回廊から西域北道にかけては、砂漠というより礫漠（ゴビタン）で、写真でみるような砂丘にはほとんど出会わなかった。

礫漠は、死の世界さながらであったが、オアシス地域に入ると、さすがに春の息吹、生命の躍動が感じられた。ポプラや柳の若葉が芽吹き、条件のよいところでは、アンズ、ナシ、ライラックなどの花が咲き、ブドウも葉をひろげ始めていた。農夫たちはロバやラクダを



▲シルクロードの調査経路

使って、延々とひろがる畠の耕作を始めていた。羊の群れにつきそっている老人は、悠然として南山を眺め、子どもたちが、棒をもって走り回っている風景もあった。

天山北路に入ると、万年雪をいただく、標高五、六千メートルの天山山脈が連なり、麓には枯色ながら草原の広がりがある。イリ地区に入るため天山越えをしたのだが、峠地帯はまだ一面の雪原がひろがり、湖は硬い氷に閉ざされ、吹きつける風は水のように冷たかった。

イリに下りると、延々とひろがる青い小麦畠の中に、黄色い花をつけた油菜畠が彩をそえ、かつての日本の農村を想い出させる風景であった。紹介されていたイーニンの中学校を訪問すると、ちょうど運動会が始まったところで、それは三日間つづくという。スケジュールは組織的ではなく、クラス毎の芸術体操や競技が断続的にこなわれており、ゆったりとした時間の流れを感じさせるものであった。

調査隊の主要な目的は、シルクロード沿いに子ども遊び文化を調べることであり、各地で二十七項目の調査

をした。ここでは、お手玉、石けり、凧あげ、こままわし、の四項目について、紹介しよう。

〈お手玉〉

日本の袋お手玉は、江戸時代の後期、一七〇〇年代に案出された特殊形である。それ以前は、小石を使ってする「石なご」とか「石などり」というゲームで、この名称は、平安時代のいくつかの和歌集に出てくる。例えば、西行法師は次のような和歌をつくっている。

石なごの玉の落ちくる程なさに

過ぐる月日はかはりやはする

私がこの石お手玉の残存に気がついたのは香川県の善通寺付近にあった「いちもん」という遊びで、昭和四三年頃のことだ。気をつけて調べてみると、石お手玉は昭和三十年代までは、西日本の各地でおこなわれていた。昭和四十年代に入るとことごとく消滅し、現在まで伝承しているのは兵庫県の大屋町だけであろう。

外国の場合は、記録的には日本よりかなり古い。大英

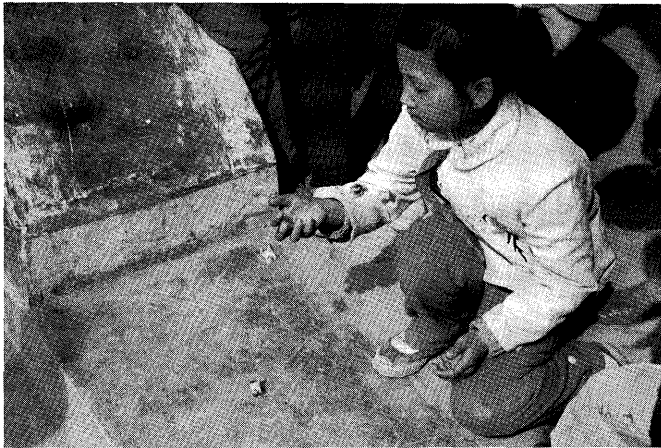
博物館のギリシア・ローマ室には、羊の距骨（後足のかかと部分にある小石状の骨）とする骨お手玉が展示されている。紀元前五百年頃のものである。トルコのアナトリア文明博物館には、ネオ・ヒッタイト時代のお城の石壁のレリーフに残された骨お手玉の図が保存されている。それは紀元前一千年頃のものと考えてよい。羊の距骨は、紀元前五、六千年にさかのぼるアナトリアの古代の村の遺跡からも発掘されている。

この骨お手玉の系統のゲームは、ヨーロッパに広く伝承されていて、英語圏では一般にナックルボーンズと呼ばれている。イギリスには、粘土を焼いてつくったファイズ・ストーンズがあり、アメリカには、金属性のジャクスがある。

というわけで、私は、シルクロードにはどのような形のお手玉がおこなわれているか、興味をもって調べてみた。

蘭州と安西の間にある酒泉には、羊の距骨六個でする^{ツァツァチ}抓骨節があり、（三十歳ぐらいの女性）、現在の男子中^{ツァンジー}学生は、小石五個でする抓石子をみせてくれた。

安西の小学校の先生にきくと、冬になると、子どもたちは抓骨節、抓石子もやっているけれども、しだいに少なくなっているということであった。五年生の女の子に



▲シルクロードの子どもの抓骨節（敦煌にて）

きくと、ごく当たり前のようにポケットから羊の距骨五個をとりだして、遊びをみせてくれたが、日本でおこなわれる石お手玉（石なご）のルールと非常によく似たものであった。

三千年も前から記録されており、ギリシアやローマ時代の子どもたちが一般的にやっていた遊びに、シルクロードでは出会えるだろうとひそかに予期はしていたが、現実の子どもの遊びとして生きているを目撃した時は感動的であった。

敦煌でも、子どもたちは、羊の距骨五個による抓骨節をやっていた。石による抓石子もあるが、抓骨節の方が多いということである。

ハミのウイグル族の子どもたちは羊の距骨五個で骨お手玉をしており、名称はガラという。しかし、小学校ではこれを禁止しているというので、その理由をきいてみると、地面の上でするので、手がよこれて不潔になるし、賭をするからということであった。

トルファンのウイグル族の小学校では、石お手玉がお

こなわれており、その名称は、オッホタッシュ・オイナッシと言いい、石五個、あるいはピン球一個と石四個でする。

ウルムチ郊外のウイグル族の女性によると、石お手玉の場合は、グッシ・オイナッシといったが、羊の距骨の方は、遊びはあるものの名称は不明であった。イーニンに行くくと、骨お手玉はなく、石お手玉をやっており、名称はベンタシということであった。

シルクロードのお手玉は、石または羊の距骨によるものであるが、すべての調査地点でお手玉はおこなわれていた。はじめに述べたように、日本でも一七〇〇年以前は石お手玉であった。石、骨、貝殻などによるお手玉で考えると、この遊びは世界中でおこなわれているし、その歴史も記録されているだけでも三千年に及ぶ。まさにお手玉は世界的無形文化財といってもよい遊びなのである。

〈石けり〉

石けりの発生は、古代ギリシアの宗教的シンボルであ

るラビュリントスで、キリスト教などの宗教的行事や造園設備に用いられ、それらが子どもたちの遊びの中に定着していったものらしい。

石けり遊びは、日本にも古くからと思われるようだが、江戸時代末期に刊行された遊び関係に詳しい書物『嬉遊笑覧』（文政十三年刊）や『守貞漫稿』（嘉永六年刊）には記載されていない。したがって、石けりの日本への伝来は、おそらく明治になってからであろうと思われる。そして、昭和四十年代までは盛んにおこなわれていたが、今は見るかげもなく衰退している。

シルクロードでは、石けりはどの調査地点でもおこなわれていたし、通りすがりに見ることもしばしばであった。

漢族の子どもたちの場合、その名称はほぼ似かよっていて、跳房^{テイクファン}子（安西、敦煌南街小、コルラ）、跳房^{テイクファン}房（酒泉）、跳盒盒（敦煌东街小）、跳方格（ウルムチ）などである。ウイグル族の子どもたちの名称は、ドウザ（トルファン）とかセンペール（イーニン）というもの

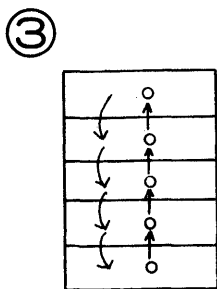
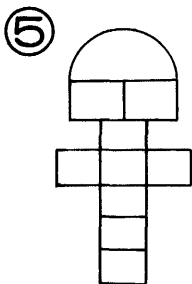
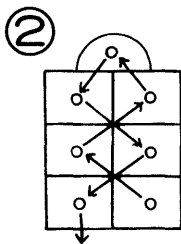
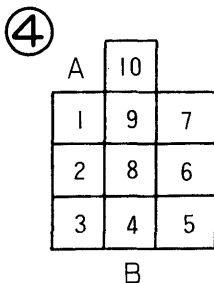
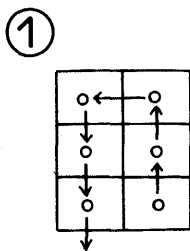
であった。

石けり方式、けんば方式どちらもおこなわれているが、最近は石を使うことはほとんどなく、砂を袋に入れ



▲シルクロードの子どもの石けり（張掖にて）

◀ 石けりの図形



た沙包サポウが使われている。地面に描く図形は、四角形とかかし形で、円形をつらねて描くのはハミの小学校の先生からきいた跳単双フレイヤンツウサウエン一ケースのみであった。

特徴的なものを紹介してみると、まず一つは、安西でおこなわれている石けり方式の跳房子で、二つのけり方がある。①のように、沙包を投げ入れて行っていく場合は休むことができないが、②のように交差して行っていく場合は、上の半円形の部分で足をつけて休んでよいというルールであった。

ハミの漢族の小学校で高学年の女の子がやっていた四フ条柱チヤオヂウ、またはブンブンチュエチャという名称のものは、大きなバリエーションがあった。③のような図形を描き、沙包（お手玉の二倍くらい）をまず最初の区割に入れ、けんけんではなく、歩きながら次々と区割に入れていく。最後の区割で、沙包を両足ではさんで後にはね上げ、前にまわし、両ひざではさんで受けとめる。そのまま区割を跳んで帰り、最初の区割になると、もう一度両足にはさんで後にはね上げ、前にまわし、手で受けと

める。成功すると沙包を第二段階の区割に投げ入れ、同様の所作をくり返していくというルールであった。これは、相当な熟練を要すると思われる。

トルファンでおこなわれているドウザは、④のような図形を描く。以前は石を使っていたが、今は円形の平らな缶に砂を入れたものを使う。石けり方式でやっていくのであるが、1から7までの区割に投げ入れる時はA地点、8と9の区割に投げ入れる時はB地点に後向きに立つ。10は前向きでよい。注目をひくのは、善人は9で成功して極楽に行けるが、悪人は9で失敗して地獄へ落ちると言い伝えていることである。古代ギリシアにつながる宗教的意味あいを感じられて興味深い。

⑤のような日本でもよくみられるかかし形の図形もあって、これは河西回廊の張掖、コルラ（漢族の子ども）、イーニン（漢族の子ども）などでみられた。

〈凧あげ〉

凧の起源もずい分古い。西洋では、紀元前四百年ころギ



▲シルクロードの子どもの手づくり凧（玉門鎮にて）

リシアの哲学者プラトンの肖像を描いた凧を、友人のアルキタスがあげたのが最初だといわれている。東洋では紀元前二百年ころ、漢の武將韓信が敵城との距離を測る

ために凧を利用したものがそのおこりだとされている。

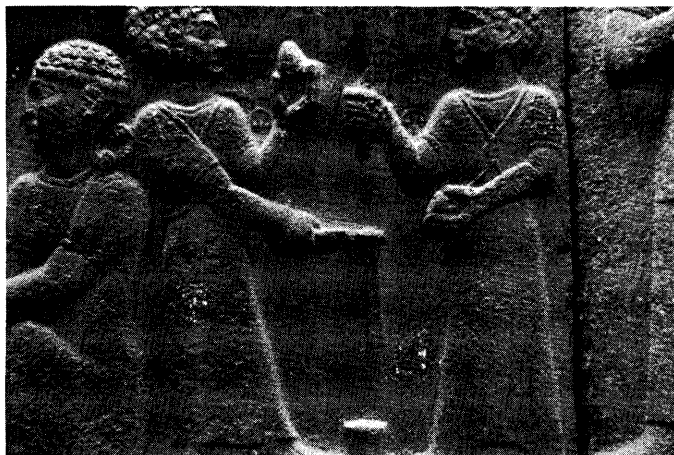
日本における凧の記録は平安時代前期であり、紙老鴞しろうしとか紙鳶しえんという名称が使われている。ギリシアや中国に比べるとかなり遅いが、竹材や良質の和紙、浮世絵や木版の技術などに恵まれ、形や図柄において多様なものが生みだされ、豊かな凧文化の形成がおこなわれた。

今では世界中の子どもたちが凧あげをしているが、シルクロードでは、三月に入って凧が強くなってくると、凧あげが始まる。漢族の子どもたちは共通に風箏フンズと呼び、凧あげを放風箏ホウフンズと言っている。ウイグル族の場合には、シュプラッカ（トルファン）とかレギレッキ（イニン）などと呼んでいる。

市販の凧もあるが、手づくりが多く、形も鳥、蝶、飛行機などいろいろのものを見かけた。敦煌の小学校では三月末ごろに凧あげ大会をするが、市販の凧をもつてくるのは百人中二、三人程度だということであった。シルクロードには、まだ手づくりの文化がしっかり定着しているようである。

〈こままわし〉

こまの起原は、おそらく木の実や貝殻を指先でひねっ



▲アナトリア文明博物館の鞭ごまのレリーフ

▼こまの胴を紐鞭でたたいて、回転を
与えて回す。くり返し鞭でたたく。



て回すことにあつただらうと思う。紀元前一千年ころには、木を円錐形に削り、紐鞭でたたいて回す鞭こまがつくりだされている。ギリシア時代のこまもこれであつた。

日本では、『日本書記』雄略天皇紀に、筑紫に駐屯してい

た高麗^{こま}の兵がこまをわしに興じていたという記述があるようだから、唐時代の中国から高麗を経て伝来したものであろう。名称も高麗^{こま}にちなんでいるものと思われる。

ろくろ挽物細工の発達している日本では、じつに多様なこまがつくりだされているが、ヨーロッパでもアジアでも、今だに鞭こまが一般的である。

シルクロードの子どもたちのこまも、鞭こま一色であつた。このこまは胴体に鞭の紐部分を巻いて回し、紐鞭でたたいて回転力をつける。名称は、漢族の場合、打^ダ猴^{モウ}（酒泉、敦煌）または打牛^{ダニウ}（安西、ハミ、コルラ、イーニン）の二種類があり、ウイグル族の場合はヌル（トルファン）、ペケルゴシ（イーニン）などと呼んでいた。

シルクロードの各地では、冬期氷の上でこのこまを回す。だから、氷に接する先端部に鉄の芯が打ちこまれている。

（京都大学教育学部）

保育、遊び、散歩

加用 文男

ええ？ ほんと？

『エルマーになった子どもたち』（岩附啓子＋河崎道夫 ひとなる書房）という本は、保育における遊びの実践記録書としてひそかなるベストセラーといわれています。

「エルマーのぼうけん」（ガネット作）を読み聞かされた子ども（五歳児）たちが、その最後の部分を読み終わった後で、保育者から「（そういえば）む

かし、おじいさんが片田の山へ出かけていったとき、ほら穴のなかでりゅうのしっぽをチラッと見たことあるって聞いたことあるよ」、という言葉聞いたことがきっかけでした。

そこで、「へえー、あす遠足に行く片田の貯水池にりゅうがいるの？」「ぼくたちはほんとうに探検に行くの？」「そんなら、エルマーといっしょやな、ぼくたちも探検にいくんや」「スゴイ！」、とい

うふうに進展していきます。

こだわる人たちがいますので念のため付け加えておきますが、ここで最初のきっかけをつくったのが誰であったかは主たる問題ではありません。子どもの発言だったという場合ももちろんあります。

同じく河崎氏が共著者になっている『ぼくらはへなそうる探検隊』（ひとなる書房）は東北地方のある保育園が舞台になっていますが、ある日、園の近くの林に散歩に出かけたあとで康君という男の子が「先生、ぼくね、へなそうる見たつたよ」と言い出したことがきっかけでした。

「ぼく、こうやって大っきい目で見たんだから」。目をパッチリさせながら一生懸命話しているその表情の真剣さを受け継ごうと、保育者が取り上げて他の子どもたちに伝えたことから始まっています。子ども「ほんとうにへなそうるだった？ 赤と黄色のしましま模様だった？」。康「そうだったよ」。子ども「どのくらいの大きさ？」。園庭に出た博行君

「先生、ウヘン、ウヘンで声するよ」。以下議論が続きます……。

こう言う時の子どもたちの発言は、いわゆるふりを楽しむごっこではありません。保育者やクラスの子達の現実の発言に対して、「えー？ ほんと？」「スゴイゾ！」と興奮した反応を示しているのです。さて話を戻して、「エルマーのりゅう探検」をかねた遠足当日には、山の中をあちこち捜しまわったあげく、やっぱりりゅうはいないんじゃないか？と思われた頃、再び保育者が、突然「あっ、りゅうのしっぽが見えた！」と叫ぶのです。

これをきっかけに右往左往の大騒ぎが始まり、「どこに」「どこに」、といっせいにうしろをふり向く子どもたち。「なんにも見えへん」「どっちのほうに逃げていったんやろ？」「女の子がぎゃあきやあ騒ぐもんで、りゅうがびっくりりしてにげてしもたんや」と怒りだす子。

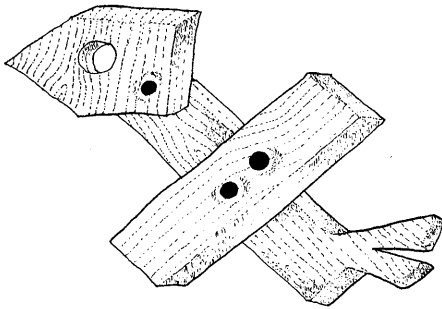
はじめのうちは見ることができなくて残念がって

いた子どもたちの中にも、しだいに「ガサガサいう音が聞こえた」「ぼくはチラッとしかつぼが見えたような気がする」、と会話に微妙な変化が生まれ、帰りのバスでは「りゅうが見られてよかったなあ」、となっていくのです。

普通の取り組みでは話の大筋はこのあたりでおしまいになるのですが、実践者の岩附さんはそういう人ではありませんでした。その後、子どもたちはこのりゅう探検の経験を生かして劇遊びを楽しむ機会を得、また世界地図や地球儀をだしてきて本にあった「動物島」や「みかん島」などを捜し当てて行きます。公園で「エルマーの家づくり」もします。みんなで絵を描き、話もつくり、絵本を作ります。大展開していくのです。もちろんその過程では議論もえんえんと続いており、「一億年も前に滅んだはずの恐竜が何故生きていたのか?」「エルマーたちが誰にもいわずにないしょにしていたはずの話をどうして作者のガネットさんが知ったのか?」、などな

ど驚くべき議論を展開しています。

何故生き残っていたのか? については、議論の末、「みんなに好き嫌いがあるように、りゅうにもあって、スカンクキャベツが好きだったりりゅうだけ



が生き残れたんだ」というダーウィンばりの結論へ。「じゃあ、そのスカンクキャベツって何だ?」、ということになります。さっそく、園にある野菜図鑑を出してきて調べるのですが、当然ながら出ていないのです。

「日本の図鑑にはのってないんじゃないか?」、とあきらめかけていたその夜。保育者はなかばあきらめつつも、もしやとも思いなから自宅にある植物図鑑とにらめっこ。夜もふけてきた頃になって、「ザゼン草」を発見します。これが北米あたりではスカンクキャベツと呼ばれているのです。

ああ、早く朝が来ないかなあ、驚く子どもたちの顔が浮かび眠れぬ夜をすごしたそうです。翌朝、「おはよう、みんな、スカンクキャベツ見つけたよ!」、とさくら組の部屋に飛び込んでいくと、「えーっ! ほんと? 早く見せて見せて、胸がドキドキして心臓が破裂しそうや」と子どもたち……

(以下省略) ……。

評価の背景

以上は概要ですので、興味のある方には是非原本をお勧めしますが、保育の関係者の間では評価は分かれるかもしれません。「実に面白い、子どもたちがイキイキして探検に出かけ、頭をひねり、議論し、などなどすばらしい、感動した」、という意味から、「でも、こういうのって遊びなのかしら? 保育者の仕掛けだし、本気になっちゃってるし……ごっこじゃないみたい」、という消極的な意見まで多様なようです。

こういうのは遊びに対する感覚の問題ですので、日本中の保育者が全員一致で賛成とか反対とかいう問題ではもちろんないでしょう。遊びや保育に対する感覚の多様性はあってしかるべきものです。ただ私は、ある時のあることをきっかけにして、感覚の違いが実は背後にある保育の条件によって生み出されている場合があるらしいことを知りました。それを書いてみたいと思います。例えていえば、西洋人

の肉食志向、日本人の魚志向などが、単に好き嫌いの問題というよりも、大陸の遊牧民と島国の農耕民の違いから生まれてきたものである、といったことと似ているかもしれません。

ある研修会で

さて、話を戻しまして、私は数年前にある地方の幼稚園の先生たちの研修会に出かけました。子どもの遊びについての講演依頼でした。その時、話の一部として「エルマーになった子どもたち」のような実践を紹介したのです。その後の意見交換の中で、五歳児担当のある先生から次のような素朴な質問が出されました

「私たちも冒険物語が好きで、エルマーのぼうけんもピーターパンも読み聞かせて、それを素材にごっこか劇遊びをやります。子どもたちも大好きなんです。でも、私たちの場合、たとえばピーターパンだったら、ピーターパンになったり海賊になったり

して、ごっこでたたかい場面を楽しんだり、宝さがしごっこを楽しみます。そこで、わざわざ本物らしく見せた地図を出したり、あそこに本物の宝が隠されているなんて言って、ほんとの探検に持っていくような実践はしません。そういうのは子どもの世界に大人が無理に持ち込んでいるように思いますか？」

穏やかな口調ですが、率直な疑問の意見表明でした。私の意見は、同じくピーターパン物語を素材にしても、それは素材なので、ごっこの素材にもできるし、探検・ほんとう？遊びの素材にもできる。五歳児ならどちらでも可能でしょう。どちらになるかは、その時の子どもたちの状態とか保育者のねらいや好みによって違ってくるのではないか、どちらがいいかは一般論で決められるものではないと思いますか……と答えました。

この答え方はいたって穏当なものでしたので、表

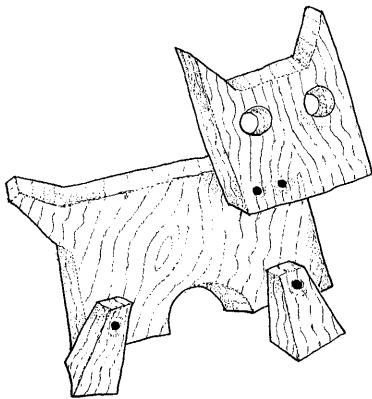
面的には納得していただけたように思えたのですが、どうも先生たちの胸にストンと落ちてはいないようにも感じられました。その後、幼稚園でのピーターパンごっこの実際のところの実例をお聞きしているうちに、ふと私は尋ねました。

「あの方、室内での実践のお話が多いみたいですが、散歩にはどういふところに出かけられますか？」

先生「それが問題なんですよ、私たちの地域の幼稚園というのは、教育委員会から散歩を許されていませんので、私たちもできないんです……」。

私の中で、ある氷解現象が起きました。「先ほどの話とそのことが関係していないでしょうか？ 園内だけでの保育では、室内はもちろん園庭でも、あそこには何か隠されているのではないか、ひょっとしてあそこには何かがあるぞ、というような発想は出てきにくいでしょうか？」

二、三歳児ならまれにあり得ます（押入など）



が、四歳児や五歳児ではちょっと考えにくいですねえ。これがたとえ散歩先の林とか山とか大きい公園だったらどうですか？ そういふところで、ピーターパンごっこをする。そうしますと、子どもの中

には、ふらふら歩いているうちに、どこかで紙切れみたいなものを拾ってきて『先生、これ何だろう？ ひよっとして海賊フックの宝物の隠し場所の地図じゃない？』、なんて言い出す子が出てきても不思議ないでしょう？

こういう時、子どもたちの集団に遊びの方向をめぐって分岐が生じているわけですから、保育者は二つの選択肢の前にたたされることになるわけですよ。それを取り上げて『うわー、ほんとかもね』と、みんなして探検に走る方へと向かうか、それとも、一応その子の考えは聞き置いて、やはり遊びとしてはそれまでのごっこ方向で継続して楽しむ方を選ぶか、そういう分岐です。保育者がそのどちらの方を選びなくなるか、それはその人の好みもあるし、その時の子どもたちの集団の状態もあるでしょう。何か、そういう問題のように思いますが……。

議論は、時間切れもあってそこでおしまいになっ

たのですが、印象深い経験でした。

保育観と保育の条件

保育内容は、単に考え方の違いというだけでなく、実は保育をめぐる条件によって深いとところで規定されています。地域・立地条件、保育者の労働条件・集団構成、親たちの層、園の歴史、園長や自治体・教育委員会などの姿勢、保育内容をめぐる保育者の自主性の保証程度……。

乳幼児保育の場では、散歩が自由にできる条件があるかないか、これは決定的な違いをもたらします。そうでないと「園は子どもの宇宙である」などといったせせこましい発想をもたらしてしまうわけですよ。

十数年前ならいざ知らず、現代では家庭でも室内で過ごすことが多くなっていますし、それでなくとも子どもたちの経験の範囲は非常に狭い場所に限定されがちです。保育所や幼稚園でこそ、子どもたち

の実情に即して、経験の幅を広げられるように散歩などに意識的に取り組んでいく必要があるのではないでしょうか。地域の多くの大人たちとのふれあいも生まれてきますし、自然とのふれあいも追求すればまだまだ可能です。

そういうことに加えて、保育者自身の保育観への影響という問題もあります。散歩のような取り組みをいつもやっているか、ぜんぜんやっていないか、これによって保育の形態そのものが違ってきますので、日常目にする子どもたちの姿も当然違ってきます。これが保育者の子ども観にも少なからぬ影響を与えてしまわないはずはないのです。

先に紹介した「エルマー」「へなそうる探検」だけでなく、「ガリバーと21人の子どもたち」「おおどろぼうホッツェン・プロッツと共に」（以上は京都）「ブロンンのぼうけん」（北海道）などなど類似した実践はたくさん報告されてきていますが、いずれもある共通点を持っているのです。園全体として

日常的に散歩などの取り組みを重視して、保育の中にしつかりと位置づけ、遊びの展開の基礎のひとつと考えているのです。そういう園、保育者たちによる取り組みなのです。山や川や林や森は謎と不思議に満ちている、そういう背景を利用してこそ成立し得たといえそうです。

是非、これを機会に自分たちの保育観が自分たちの置かれている保育の条件によって深く規定されているのではないかと、そのことを考え直す機会にしたいだけだと思います。

（京都教育大学）

松本のお正月

「飴市」と「三九郎」

美谷島いく子

私の幼い頃には、今より雪が多かったのだろうか。お

正月は、いつも雪の中で過ごしたように思う。空は、抜けるように透き通った青空だが、凍み付いた根雪が残っていた。雪と氷に閉ざされるこの季節には、お正月から節分、道祖神祭りに至る、多くの新年をこよほ寿ぐ行事で彩られている。

その中で、商店街での「飴市」と主に農村部での「三九郎」は、若衆や大人の助けはかりるが、子ども仲間の行事として、子どもが中心となって主体的に行っていた

松本独特の行事である。

「飴市」

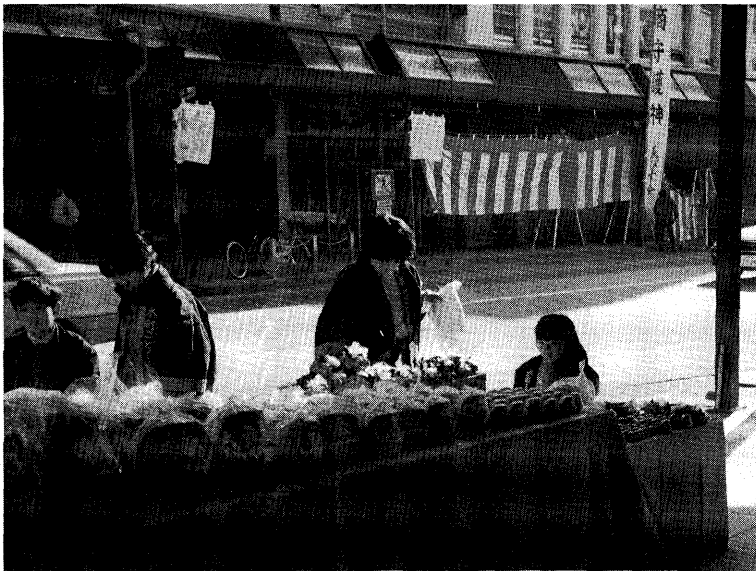
一月十日、十一日は、松本城近くの市街地は、初市である飴市（昔は塩市）で賑わう。

九日朝、中町、伊勢町、本町等の若衆が、普段は深志神社にある市神様の拜殿を迎えにゆき、各町内の道路上に仮拜殿を組み立てる。十日夜、呉服店が「市切」いちぎれ（切端や晒しを袋に入れたもの）を売り出す。

拜殿は間口二間もの立派なもので、組み立てに鷹職を頼む程だったものもある。中央の本殿には雌雄の獅子と賽銭箱、右殿は障子がたてられ御神酒を頂く所、左殿は子ども達がそこへあがって達磨や縁起物を売る所。

市神様の拜殿の中の子どもの店や、何軒か出ている子どもの露店からは、「福達磨いかがですか！ 福達磨いかがですか！ 家内安全、商売繁盛！」という元気な子どもの声がとびかう。子ども達の店では、大小の紙達磨、獅子、福飴が売られている。

朱で福飴と刷られた白い紙袋の中には、白い板飴、金太郎飴の他に、塩^{かみ}吹の形をした飴が入っている。牛による塩の運搬をしのげる塩吹の形の飴は、飴市の時にか買えず、一袋に少しだけしか入っていない。雪のような白地に、赤、緑、桃色の縦線が入った塩吹の飴を、弟と奪い合ったものである。「どうやってこんなふうに塩吹をパンパンにふくらますのだろうか」と、不思議に思いながら口に入れると、すぐに塩吹はつぶれ、さらりとした甘味が口じゅうに広がった。



▲飴市、子どもの露店（本町）。大きな達磨から小さな達磨を並べて準備中

山国信州では、塩は遠い海岸から運搬しなければ得られないので貴重品であった。人々はその時々々の支配者により、北塩、又は、南塩に頼らなければならなかった。

戦国時代に、甲斐の武田信玄の勢力下にあった松本の人々が今川氏に東海の塩（南塩）の供給を断たれ苦しんでいることを聞き、越後の敵将、上杉謙信が、日本海の塩（北塩）を送って助けた。牛の背に付けられた北塩が、糸魚川―千国―小谷を経由して、永禄十一年（一五六八年）一月十一日に松本に到着し、分配された。これが塩市の起源という。

その時、北塩を積んだ牛をつないだ牛つなぎ石が、本町から伊勢町に曲がる角に残っている。飴市の日には、牛つなぎ石には注連縄が張られ、塩が供えられる。

松本の人々は、「敵に塩を送った」謙信の義侠心をたえ、一月十一日を、塩に対する感謝の日として初市の日としたという伝説が残っている。

しかし歴史的には、中世、南塩に頼っていたのが、何かの契機で北塩に変わり、江戸、明治時代と続いてき

た。塩市は、この画期的な変化をもたらした事柄を記念する行事であったろうと言われる。武田、上杉両軍に分かれ、塩袋の乗った神輿をはさんでの綱引き「塩取り合戦」を見ながら、それは何だったのだろうかと思いを巡らす。

江戸時代には、塩市の塩売りは天神の神官がした。明治には市神様の仮拝殿で、子どもが、小さい紙袋に入れた塩をお札と一緒に売った。粘土製の金の達磨、恵比寿、大黒と共に塩が並び、「塩じゃ、塩じゃ！」という子どもの囃し声で賑わったという。

この塩は、一月十五日の朝の小豆粥の中へ縁起が良いと入れたり、春先の味噌仕込みに使うと味が変わらないという。

明治三十八年（一九〇五年）、塩が国の専売となった為、塩市は飴市に変わった。当時松本は、安曇米を原料にした飴の生産高が多かったこともその一因という。塩と飴は共に白くて神饌として用いられるが、味は正反対。飴に変わったことで、子どもにとっては一層喜ばし

いお祭りになったと言えようか。

飴市の子どもの店は、子どもに商売を身に付けさせる為、仕入れから値段決め、儲けの配分まで、全部子どもに任されていた。

例えば、七月の天神祭りの際、里山辺からお囃子の笛を教えにきてくれる小父さんへのお礼として、飴市の利益の中から子ども達自身で卵を買って届けたという。昔は男子のみが参加でき、六年生に「音頭おんど」がいて、儲けの配分を決めていたが、今は配分せず、PTAでスケートや海に連れて行く費用にするという。

飴市の子どもの店に参加するのは、松本城に近いので、火事を防ぐ為、三九郎が禁止されていた商店街の子どもが多く、門松は他の町内の子どもに持っていったらう。

「三九郎」

小正月の一月十四日、又は、十五日の夜は、正月の門松や注連飾り、おやす(1)を焼いて歳神を送り、太陽の蘇り

と、新年の豊作を祈る火祭り「三九郎」が子どもによっておこなわれる。長野県下ではほとんど焼き、道陸神焼き、おんべ焼き等の名があるが、松本平では「三九郎」と呼ぶ。

「三九郎」の名称の由来は、先学により注目されてきている。

柳田國男は、「信州のドンド焼きには、道祖神祭りの分子が著しく加味せられている。東筑摩・南安曇の二郡などは、三九郎といふのが其火祭の柱の名になっているが、是は子供の囃し言葉に三九郎・三九郎と喚びかける文句が多い為であって、或は道祖神主三九郎などと書いた紙札を貼っていたといふから、本来は此神の祭の折に作られた人形の名であったやうである。……三九郎太夫といふのは木を刻んで作った怪しげな形の棒であり、又は男女二つの人形であることもある。⁽²⁾」と述べる。

折口信夫は、「この三九郎といふ称呼は、恐らく越後の方から這入って来たものだろうと思ふ。越後に福岡といふ処がある。処が、松本附近では、前にいった三九郎

を作るのに子供の中から頭分を選出し、……それをふくま三九郎太夫と称し、まづ、これがお札を刷るので目隠しをして『福間三九郎神主』——とあつたかと思ふ——印を押す。それから、この三九郎太夫がどんど焼きの主役になって活躍するのである。……どうもこれは、以前、越後の福間から年々正月にやって来て札を配って歩いたものがあつたが、来なくなつて、村々の子供が、その代役を勤めるやうになつたのではないかと思ふ。③」と述べる。

胡桃沢勘内の、「松本の神主福間三九郎が、神に仕へる尸童である……④」とする説の他、三九郎を作るとき、三本の柱をたて、九本の横木を渡すからとする説、凶作・重税・流行病の三つの苦勞とする説があり、定説はない。

私の幼い頃の三九郎

十二月中に、父兄と五、六年生が一日がかりで東の村有林へ用材を切り出しに行く。三九郎の芯棒となる太い

松の木を切り出す。根雪になり三九郎をたてる田の地面が凍つてしまふ前に芯棒をたてる穴を掘り、円錐状に、三本の芯棒を組み立てて置く。この三九郎の中心となる柱の名称を「神棒」と呼ぶ。

松集めは、一月七日に七草粥を供えて、松おくり(松納め)された外飾りと、わら一輪、十五日に、内飾りと去年の達磨、破魔矢、縁起、お札、物作り書き等を集めて、各家々を回る。

三九郎作りは、三本の芯棒に横棒を渡し、縄でしばり付ける(大三九郎の横棒は九本、小三九郎は三本位)。次に横棒にわらをつるし、中にもわらをつめる。その回りに松や注連飾りをしばりつけ、頂上には達磨を飾る。一番大きい「大三九郎」から小さな「呼び三九郎」に至るまで、数個の三九郎が並んで作られる。それらの三九郎の間には注連飾りが張られ、でき上がり。

三九郎は小学生の男児だけで行われる。女である私は、繭玉団子を焼きにゆく時以外は弟のするのを横目で見ていただけ。又、昨年不幸のあつた家の男児も、穢れ

ているという理由で参加できない。

この祭りは、六年生の大將を中心に、あくまでも子ども達だけの力で、子ども達の自治で行われる。弟は「優等生のN君は三九郎を作っている途中で皆と喧嘩してやめて行ったのに、三九郎を燃やす時になって、仲間に入れてくれと頼みに来た」と怒って言っていた。子ども同士喧嘩をしながらも、三九郎を作り上げて燃やすこの行事は、学校とは違った人間関係を深めてゆく場ともなっていた。

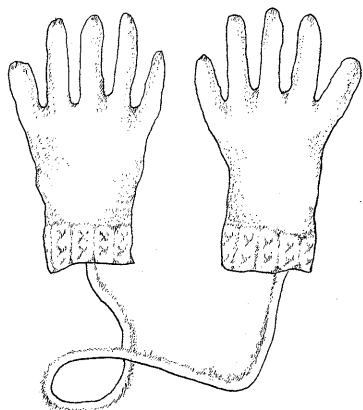
父や祖父の頃には、三九郎はもっと盛大に作り、三九郎の中を小屋にして、そこでお餅を焼いて食べて、泊り、隣村の三九郎仲間が火を付けにくるのを防いだという。

十五日の夕方、あたりが薄暗くなつて来ると、遠くから「三九郎、三九郎、早く来ない」と燃えちやうぞ。早く来ないと燃えちやうぞ。じいさん、ばあさん、孫連れて、お団子焼きに来ておくれ！」と囃す声が聞こえてくる。呼び三九郎という、一番小さい三九郎に火がつけら

れたのである。

私は、十四日の繭玉作りの時に作り、柳の枝にさしておいたお団子を持ち、凍てつくような寒さの中を、父と駆けていった。小三九郎の芯棒が燃え落ちた所へゆき、おきの中にお団子を入れて焼くとよく焼ける。

順々に近くの大きい三九郎へと火が移ってゆき、空は



真赤に燃え上がり、私の顔も火照って来る。「三九郎、三九郎、早く来ないと燃えちゃうぞ……！」という囃し声もクライマックスになり、最後に残った大三九郎に火がつけられると、竹がばちばちはね、火が天まで届いたように明るく燃え上がる。

火の粉が高く上る程豊作、大三九郎の神棒が南へ倒れば豊年、書初めが舞い上る程字が上達するという。三九郎の火で焼いたお団子を食べると虫歯にならないと、帰宅後、家族で分けて頂く。囃し歌に「じいさん、ばあさん、孫連れて……」とあるが、老人も三九郎の火に当たると若返るといふ。

私はある時、いつもと違う囃し歌を聞いた。Tという、八十歳を過ぎたと思われる髭の老人が、子どものように歌っていた。その時その囃し歌の意味はよくわからなかったが、はつきりと心に残った。しかし、その意味を誰かにたずねるのはいけないことのように思われ、ずっとそのままにしていた。今になると、それは卑猥な意味の歌だったようである。

三九郎の火祭りは道祖神祭りと結び付いている点も多く、作物の豊作を願う予祝行事であることから、物を産み出す的な言葉があってもおかしくない。この類の囃し歌は、明治、大正時代に、風俗を乱すとして制止され、消滅していった。

三九郎を燃やし終わった男児は大将の家（頭家）へ行き、皆で御馳走を食べて、カルタ、トランプ、花札等をして遊ぶ。

翌十六日には、男児は三九郎で燃え残った木を薪にして、少しずつ売って歩く。この薪を春先の味噌炊きの時用いると、味噌の味がよいという。薪を売ったお金は年齢別に分配する。

小正月の晩には上雪が降ることが多く、三九郎の燃え跡をすっぱり覆ってしまう。

地区により異なる三九郎

私は数年前、同じ市内で引越をした。新住所となった地区の三九郎に、PTA役員として娘と一緒に参加し

で、「エッ、これが三九郎」という位驚いた。それは、同じ三九郎という名前でも、私が幼い頃体験した三九郎とあまりにも違っていたから。

第一に、小学生の女兒も参加するようになったが、子ども達だけの力でするのでなく、大人の主導型である。

第二に、新興住宅が増加しつつある所の為、定まった三



▲三九郎（薄川の川原で）。

燃え上がる大三九郎と小三九郎

九郎場がなく、場所の確保が大変で二度も変わっている。第三に、三九郎の囃し歌は全く歌わない。第四に、山へ松迎えに行き、注連飾りを手作りするという人は少なく、買った小さな門松や飾りとなり、稲わらもないので三九郎も小さいのがひとつだけ。その反面、人が多いので混み合って、お団子がうまく焼けない。等々……。

この時の私は、三九郎と言えば、自分の幼い時体験した三九郎と共通なイメージであって当然と、無意識のうち思っていた。お団子さえ焼ければどんな三九郎だろうと良いと思おうとしても、何か違う感じがして、「細部にこそ神が宿り給う」とばかりに、細部にまで拘り、驚き、戸惑う。「自分の幼い時体験した三九郎こそが三九郎である」と思っていたのである。幼児期の体験の面白さ、不思議さである。

しかし冷静に考えてみると、松本市だけでも約四百箇所も三九郎があり、各々の地域によって三九郎のやり方には独自性があり、違って当然である。

娘が幼稚園の頃住んでいた官舎のある地区の三九郎は、薄川の河原に作られ、商店街なので三九郎のやり方や形も、又違っていた。

例えば、門松以外の材料について考えてみよう。私の幼い頃三九郎をした所は、稲作地だったから、稲わら文化とも言えるような、稲わらから手作りの立派な注連飾り、注連縄、おやす、宝船等が多く出され、わらも一輪

ずつもらえたので、わらを豊富に使った三九郎を作る事ができた。昭和初期の三九郎の小屋作りの際には、自分の手廻いの縄で「一人、いく尋縄」持って参加すると決まっていたという。山沿いの畑作地では、麦わら、豆がら、茅、杉であり、市街地は門松だけである。

形も円錐形の他に一本（棒）三九郎があり、数も一五と異なり、お札刷りやおんべ作りも多様である。

子ども達が作り上げ、小正月の夜、ほんの一時の間燃やされてしまう三九郎にも、大きな文化が潜んでいる。

（松本市在住 舞々同人）

〈註〉

- (1) おやす…稲わらで作った、御歳神様にお餅やご飯を供える入れ物。門松や松飾りと共に飾る。
- (2) 柳田國男『歳時習俗語彙』国書刊行会 一九七五
- (3) 折口信夫『折口信夫全集』15巻 中央公論社 一九七一
- (4) 胡桃沢勘内『福間三九郎の話』筑摩書房 一九五六

年のはじめに

岩上 節子

様々な発見、発明。コンピュータを活用した実証的研究・開発に支えられた日々。物が豊富で便利な現代日本の生活。なのに、安心できない毎日。特に、子育て。

いつから、自分自身で『生きること』さえも、データで証明し、保証されなければ、安心できなくなってしまうのだろうか。

「子どもの生活は『遊び』が中心です。『遊び』

のなかにはいろいろな可能性が含まれています。私達大人は、その可能性に気付き、それがよりすばらしく、伸びやかに、そして、その人らしく育っていくことができるように援助を試みていくことが大切なのだと思います。」

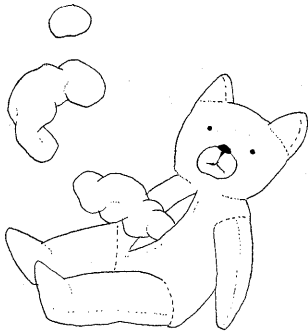
このことは、私が幼稚園という場で仕事をしていくなかで、先輩の先生方から学び、かつ、子ども達と生活してかかわっていくなかで、自分自身の手ごたえとして感じ、納得したことのひとつで

す。もちろん、一人一人個性の違う人達が相手です。その人の何に自分が気付いて、その気付いたことに担任としてどうかかわっていくかという決断を（たいていの場合、即座に）していかねばならないという現実、荷が重いものがあります。子ども達が帰った後に、「あれはしない方が良かった」とか、「した方が良かった」とか、反省ばかりが残ります。それでも、子どもとの生活のなかで『共に育っていく実感』は確かにあって、『遊び』に夢中になる子どもの自由を、できぬかぎり尊重する保育をしていくことに、今、迷いを感じません。『実感をもって生きられること』は、今、とても必要なことだと思うからです。

れる瞬間が増えていきました。「ちょっとずつ、自分なりにがんばっていいこう」という気になつて、実際に、うれしい手ごたえを感じられることも増えてきます。自分自身が安定していられる時には、同じものを見ても、その良さに気付き、それを伸ばし得るようなかかわりがしやすくなるように思われました。でも、これはしょせん、幼稚園における先生と子どもの実感にすぎません。現代社会における親子の実感とはなり得ていない現実が目の前にあるのです。我が子を育てている親の立場としては、まだまだ安心できないのです。

「先生、私だって親ですから、子どもが楽しんで遊んでいれはうれし、子どもの思いもかけないような発想に自分自身が学ぶことも多いんです。でもね、今の日本の社会で、本当にそれだけで安心していいのかと思うと、いつも不安なんです。伸び伸びと遊ばせてあげたいと思う気持ちも本当なのに、塾やお稽古事に行かせている

と安心できる気持ちも本当なんです。子どもが友達と遊ぶ約束をするにしても、スケジュールの調整をしあわなくてはならなくて……。小さいのに大変だなあと思うんですよ。でも、今はじめないと手遅れになってしまうのではないか、と思うとやはりあせってしまうんです。だって先生、先生



のおっしゃることは、私だって大切だと思いますけれど、それで現代を生きぬいていけるといって確かな保証がありますか。そういうデータは、なかなかみつからないじゃありませんか。いいかげんなものかもしれないけれど、塾やお稽古事にはある程度のデータがあつて、ついすがつてしまうんですよね。これでいいのかな、とは思うんですけどね……」

親の本音に対して、私は私なりに思うことはあるけれど、それを伝えたからといって、親が安心できるとは思えません。何故なら、私が保育中に感じている手ごたえは、あくまで私の感覚的なもので、未来永劫不滅の真理ではないからです。毎日の生活のなかで子どもが変わってきたことであるとか、生き生きとした表情かおをするようになったことであるとか、確かにすばらしいことではあるけれど、それがその人の人生のなかでどんな役割を果たすかは、私には、証明できないのです。

「データはありますか」と問われれば、「ありませんけれど、大切な気がするんです」としか言えません。そして、言いながら、「我ながら説得力がないなあ」と感じ、不安な親の気持ちに変なところで共感してしまいます。伝わってほしいことはあるのに、上手く伝えられない。そんなもどかしさを抱えながら、また、日々は過ぎていきます。そんな時、私はある言葉に出会い、それが、私の心に強く響いたのです。

昨年のある日、私は、TVで放映していた映画「おもひでぼろぼろ」を見るともなしに見ていました。その映画は、主人公であるOL（東京在住）が、夏休みを利用して、親類の家へ農業を手伝いに来る所から始まります。そこで、脱サラして有機農業にとり組んでいる農村の若者と、田舎の美しさに感動している都会育ちの主人公が、次のようなやりとりをしていました。

トシオ「田舎の景色というのはね、自然そのものじゃない。人間が自然との共同作業で作り上げたものなんだ」

タエ子「そうか、だからなつかしいんだ。生まれ育った土地でもないのに」

私は今まで、田舎風景を見て心がなごむのは、それが自然本来の姿だからだと無意識のうちに思っていました。でも、今は違うと思います。自然本来の姿は、時に『友』になり、時に『敵』になるものです。自然は自然のまま存在し、人に恵みをもたらしてくれることもあれば、人を傷つけることもあります。そしてまた人間も、自然から生み出たものでありながら、自然を生かしても殺しもするので。映画のなかで、主人公が田舎の景色を見てほっとするのは、おそらく、人間が自然のなかで、自然と折りあって自分達の居場所を作り、暮らしている姿に、同じ人間として、安心感

を覚えたからだと思うのです。「ああ、ここは、人も自然も、その本質^{ほんしつ}なりに存在^{そんざい}している場所なのだ」と。

本来、『生きること』というのは、自分と何かの共同作業をつみ重ねていくことのくり返しであったように思われます。たとえば、私は、幼稚園という小さな社会で、私は私のままに、子どもは子どものままに存在していながらも、お互いの魅力に気付き、時に、時間や空間や気持ちを重ね合わせる事ができたとしたならば、きっと手ごたえを感じ、ほっと胸をなでおろすのだと思うのです。その実感を何で証明すればいいのか、どうやってデータを集めれば、皆が安心できるのかはわかりません。でも、やはり、試してみる価値はあるように思われるのです。

何かの折に、ほっとする自分の感覚を信じてみ

たい。

自分が、自分をありのまま受けいれるところから始めてみたい。

子どもが、この世の中に生まれてきただけでよかったと信じていられるように、ありのままの自分を出すところから始めてみたい。

そして、そこから作り出される何かを感じて、親にも安心してもらえたらいいな、と思います。何ができるかはわからないし、相変わらず保証もないのだけれど、今をつみ重ねていくことで、実感をもって生きていきたいと願う年の始め。どうぞ、今年もよろしくお願い申し上げます。

一九九五年正月

(幼稚園教諭)

お正月さんがやってくる(2)

二人のおばあちゃんの会話より

はる・みつ



カット・佐藤和代

はる こうしてお正月さんがやってきたんですね。

みつ 一夜明けるとね、気分も変わってね。何もかもが新しく、清清しく、一つ年齢を重ねて数えあったもんだよ。一つ年齢をとることがお正月の嬉しさでもあったのかもしれないねえ。お父さん、お母さんも遊んでくれるから、お正月は嬉しかった……準備した晴着を着せてもらって、たこやお手玉を作ってもらって遊んだね。たこやお手玉の材料も、全部家の中にあるものだから、お兄さんやお姉さんが教えてくれたもんだ。

そうそう、お手玉を自分で作れるようになってから、兄さにごく叱られたことがあったよ。それはね、お手玉の中に「お米」を入れて作ったんだね。自分で作ったもんだから、自慢したくなってね、兄さ達若い衆の集まっている所へ持って行って遊んだんだ。そうしたら、よりによって、中からお米がこぼれてね。それを見た兄さの剣幕といたらなかったよ。それはもう怒られた。「虫くいあずきを入れる。大事なお米を入れて遊ぶとは何ごとだ！」って訳だ。そりゃ

もうすごい怒り方で、おっかさんの所へ逃げてったけど、その時はかばってくれなかったよ。「お前が悪いんだから謝りなさい」って言われたね。

はる お米をいかに大切にしたかが伝わってきます。あずきも虫くいを入れたのねえ。

みつ ハハハ：そうだったねえ。お正月といえば、子どもにとっては何ととっても「お年玉」。そりゃもう、お金を手にするのはお正月ぐらいなんだから、大はしゃぎだよな。大人だって自給自足の生活で、お金とは関わらないで生活してるんだからね。金額？　そう、五銭、穴のあいた五銭だったね。いろんな所からお年玉に五銭をもらって、糸輪に通して首から下げて、大喜びで遊んで、遊んでるうちになくて、しかられて……毎年そうだったように思うよ。よくもまあ、懲りもせず……嬉しかったんだねえ。そうそう、時々、五十銭なんて穴のあいてないお年玉をもらった時もあったけど、母親が「穴のあいたお金にとりかえてあげる」って、持ってったきり、返ってこない時も

あったよ。ハハハ……。

一月三日、四日になると、親類やらご近所への年始回りで村の人どおりが賑やかになるのよ。姑さんの年始回り、嫁さんの年始回り、姑と仲の良い嫁さんは、一緒に年始回り。男の人？　男の人達は酒飲んでたね。夫婦仲の良い所は、夫婦で塩釜神社（子宝・安産祈願の神社）へお参りに行ったりね、どこの夫婦が仲が良い、嫁姑の仲が良いって、子どもの目からもすぐにわかったもんだよ。

そうそう、四日はね、前の年に結婚した初嫁さんだけが、だんなさんと揃って、実家へ帰るのよ。もう嬉しそうで、嬉しそうで、まりみたいに弾んで見えたもんだ……。初めて、実家に帰るんだものね。でもね、実家で、七日の七草粥を食べてくる嫁さんは、ばか嫁さんていわれてね。嫁さんも（嫁ぎ先へは）帰りにたくないし、親御さんも帰したくなかっただろうにねえ。ばか嫁さんなんて言われるのは誰でもいやだものねえ。昔だから嫁ぎ先に楽しい事なんかないんだよ。

古嫁さんは、小正月十五日に一、二晩、実家へ帰ったね。冬の三か月間、野良仕事はなくても、嫁さん達は、針仕事だなんだっていくらでも仕事があったもんね。男の人は、冬はお酒飲んでたけどね——。

はる 三箇日の間に、お客様は多いのかしら。

みつ お客さんは必ずあったよ。子どもはお年玉目当てで、お客さんを楽しみにしたし、遊んでももらえたしね。

親戚に新嫁さんがいれば、若夫婦を呼んで、他にも、親戚やら、仲の良い嫁さん同士やら、賑やかに往き来したもんだよ。御馳走も楽しみだし、かるたなどで、大人も遊んでたね。百人一首もたまにしたかねえ……。子どもは外で、あやとり、羽子板——これも手作り——まりつき、たこあげ、こま回し……平和だったねえ。

はる うちでは、かるたとり、双六をよくしたわね。兄弟四人でよく遊んだね。私は末っ子だったから、みんなから本当に可愛がってもらって、よく勝たせても

らった……。羽子板、たこは、買ってもらったわね。買いに行くのがまた楽しみだね。大人達、兄達が、百人一首をしているのを見て、覚えるでしょう。仲間に入れてもらいたくて、覚えたわね。

私は、お正月は、お寿司を食べに連れていってもらうのと、勿論、お年玉が楽しみだった。

そう、獅子舞が来たでしょう。いつも不思議に思ってたんだけど、あの人達は、どの誰なんだろうって。

家の人達も不思議がっていたわね。子ども達は勿論、恐ろしくて嫌だったし、私の母も、縁起物だから断れないし、誰かわからない人が家上がってくるんだから、それに、子どもは泣くし、とつても嫌がって、戸に鍵をかけちゃうんだけど、必ずやって来て、鍵を開けざるを得なかったようよ。早く御布施を受けとつて、次の家へ行ってほしいんだけど、舞って、子どもの頭をくわえこんで、子どもを泣かせて、見ている大人達は笑って……厄除け、縁起物だからと言われて、釈然としなかったのを覚えてるわ。神社の神主さ

んが、お札を売りに来たのも覚えてるわ。母は、これも断れないって愚痴ってたっけ。

お正月になると、姉やさんや、小僧さんに映画に連れていってもらうのも楽しかった。お正月映画はいつも満員だったのよ。街は人が多くて、気分が高揚して、一度なんか、下の兄が迷子になって、一人で上野から駒込まで帰っちゃってねえ、姉やさんが真っ青になって探して大きわぎしたのを覚えてるわ。あの頃の子どもは、一人で一時間位歩くのなんて、何とも思っ
てなかったのね。お正月の街を歩くのって、ちょっとした冒険で、本人は楽しかったようよ。髪結いさんの所もすごい熱気で、母や姉についていきたがったわね。

みつ 三箇日が過ぎると、四日のところろって言ってね、四日にはとろろを食べて、玄関に厄除けでタラータラーとまいておくのよ。

十四日に、もう一度お餅をついて、囲炉裏の上の繭玉をとりかえるんだよ。十四日の繭玉は、水木の木の

枝にさすのよ。真直ぐで素性の良い木でね。孫の名を「みずき」にしたと聞いた時は、いい名だと、大喜びしたもんだ。お正月さんを迎えた繭玉は、干してあられにして、私達のおやつになった。

その夜に、他の注連飾りも、全部、その家の主人が唱えながら集めて、神社へ持って行って焼いて、お正月さんを送るんだよ。

何て唱えるかって？——何ともいえん唱えじゃったなあ。

ヤ——へヨへヨホホ——
(正しく表せない)

アハハハ 字にはならんでしよう。

ヤ——へヨへヨ——ホホ——。

——終——

黄遵憲がとらえた明治の子ども (2)

『日本雑事詩』「幼稚園」、「正月の遊び」を
手がかりにして

首藤 美香子

▲「赤ん坊の天国」ニッポンの揺動▼

ところで、日本の子どもたちののびやかな生の姿を謳歌したのは、黄遵憲だけではない。例えば、E・S・モースはその代表といえる。モースは、「私は、世界中に日本ほど赤坊のために尽す国はなく、また日本の赤坊ほどよい赤坊は世界中にないと確信する。」「日本を旅行すると、先ずどこにも子供がいる……」として、子どものスケッチを多数残している。(※欧米人の目には、子

どもをおぶう日本の習慣は奇異に映ったようだが、中国人はどのような印象を持ったのだろうか。黄遵憲が発句に「都邇孩兒赴甲科」の光景を描写した意味を知りたい。ここで、黄遵憲とほぼ同時期に来日した外国人の記した日本に関する所見から、子どもや遊戯に関する言述を抽出してみよう。

まずは、チェンバレンとオールコックから。

日本は「赤ん坊の天国である」といわれてきた。実際、赤ん坊は普通とても善良なので、日本を天国にするために、大人を助けているほどである。彼らは揺籃の時代から行儀がよい。特に少年たちは内気なところがなく、全くのびのびとしている。(中略) いずれにせよ、子供たちのかわいらしい行儀作法と、子供たちの元気な遊戯が、日本人の生活の絵のような美しさを大いに増している。¹⁰⁾

イギリスでは近代教育のために子どもから奪われつつあるひとつの美点を、日本の子どもたちは持っている。わたしはいいたい。すなわち、日本の子どもたちは、自然の子であり、かれらの年齢にふさわしい娯楽を十分に楽しみ、大人ぶることができない。¹¹⁾

「赤ん坊の天国」ニッポンという印象が、極東の島国に對する彼らの友好的な感情を育み、日本人賛歌を促す側面をもったことは、想像にかたくない。そして、オールコックの言葉にみるように、子どもたちが美点を未だ保

持しているのは、近代教育の洗礼を受けていないゆえと、もうひとつ日本が遊びの宝庫であるゆえであった。

日本人はあらゆる年齢の人物のために多くの遊戯をもっている。¹²⁾

日本人のように遊び好きであったといってもいいような国民の間では、子供特有の娯楽と大人になってからの娯楽の間に境界線を引くのは必ずしも容易ではない。ここ二世紀半の間に外国人がやってくる以前から、この国の主な仕事は遊びであったといってもいいだろう。オールコック氏の本の中で最も楽しい表現の一つは「日本は子供の天国である」であった。さらに氏は日本はまた遊びを愛する人にとって非常に楽しい住処である。とつけ加えたかもしれない：日本ほど子供の喜ぶ物をおもちゃ屋や縁日の多い国はない：子供の遊びの特質と親による遊びの奨励が、子供の方の素直、愛情、従順と、親の方の親切、同情とに大いに関係があり、それが日本では非常にきわだっていて、日本人の生活と性格のいい点の一つを形成していると私

は思う。⁰³

遊びにおいて大人と子どもに境界がなく、混然一体となつて戯れる姿に向けられた過度の注視は、近代国家として産声を上げたばかりの「ヤング・ジャパン（ブラック）」⁰⁴、「赤ん坊の天国」ニッポンの成長を見守る、「大人の国」としての自負や余裕といった列強諸国の深層心理と結び付いて増幅されていったものとも思われる。しかし一方で、彼らはこの遊びの伝統世界の崩壊をも見逃してはいない。

近年、外国人が来てから、日本人の娯楽好きにいちじるしい変化が起きている。というのは、遊戯が前ほど多くなく、苦心もしていないし、またかつて特色になっていたほど熱心には、人びとが遊戯をしないのである。子供の祭りや遊戯が急に重要ではなくなってきた。⁰⁵

右の指摘の通り、急激な欧風化の進行が早くも「赤ん

坊の天国」に暗い影を投げかけつつあったことは確かである。伝統的な遊びの世界には、以下のような地殻変動が起こっていた。

例えば、明治五年の「学制」発布の翌年、東京府各区小学校設立の方法が定められ、男女六歳以上の就学が義務づけられた年は、府県に対して公園の候補地を選ぶように指示が出され、野球が紹介され、ブリキの玩具が輸入され、内務省が教育的玩具の製作を奨励しはじめた年でもある。⁰⁶この年の動きは、特殊な用具を使用して敵味方の対立関係のもと、敵密なルールに従って得点で勝敗を決するという、旧来とは異なる種の遊びが導入され、また遊戯的空間が国家により用意され、遊びや玩具の価値が教育的効果によって計られはじめるなど、以後の遊びの世界が向かうことになる方法が示唆されている。

この傾向が都心部のある種の階層を中心に顕著になつていくのは、明治二十年ころまで待たなければならぬ。しかし、瀬田貞二の整理に従うならば、江戸時代

「ゆうげ」や「ゆげ」と呼ばれ、自由自在の行為の意をも含んでいた遊戯概念が、明治初頭には、広義には子ども遊び、狭義には訓育的な集団動作の意に変化していきにくい。ちなみに、この概念の変化に東京女子師範学校附属幼稚園は深く関与していたようで、明治二年に主事関信三によって翻訳されたフレーベルの恩物論『幼稚園二十遊戯』において、「ゆうぎ」という音が登場してきたとの説もある。田太田才次郎が明治三十四年に『日本全国児童遊戯法』を刊行したのも、伝統的な遊びの喪失に対して危機感を抱いたからであった。太田は伝統的な遊びを保護するために、日本古来の伝承による子どもの遊戯の現行する状態に立って、そのやり方を採拾記録したのである。

《「正月の遊び」》

かなり横道にそれてしまったが、以上のような背景を考慮した上で、改めて『日本雑事詩』134「正月の遊び」

をみると、この詩が子どもの遊びの世界地殻変動と無関係ではなく、むしろ直截にそれを描写しているように思われる。



零落街頭羽板稀

已捐团扇過時衣

児時嬉戯都如夢

不見翩翩蝶飛

例によって、私なりに鑑賞してみよう。正月の街頭は、従来のにぎわいを失い、羽根つきをして遊ぶ姿も見かけなくなった。扇子を打ちあおぎ、正月の装いに身を飾る人も少ない。子どもたちが喜々として遊び興じていた日々は夢の如く消え、袂を翻し翩翩と蝶々のように舞う様は跡形もなくなってしまったようだ。

なんと寒々とした光景だろうか。羽根つきは、元日の遊びとして室町以来の長い歴史を有しており、中世では手鞠会の如く右方、左方に分ち男女混合で勝負を競い合っていたらしい。また、装飾用としての押し絵羽子板は、文化文政のころより流行していった。黄遵憲の来日より数年前までは、正月に江戸情趣たっぷりの羽根つき遊びがなされていたことは、先の外国人らの報告から確

認できる。

女の子は晴着に帯をしめ、顔を白粉で化粧し、唇に紅をつけると、あの黄金虫の羽の独特な色に似てくる。そしてできるだけ魅力のある髪に結って通りに出て、羽根つき遊びをする。それは二、三人で遊ぶだけでなく、大勢が輪になって遊ぶ。羽根は丸い種子で、金色に塗ってあるのが多く、そのまわりに鳥の毛が花びらのように並べて刺さっている。羽子板は木製の打棒で、片面はただの板だが、もう片面には人気役者、物語の主人公や芸者の似姿が極端な日本の形式で浮き出している。女の子がこの遊びを重視しているのは明らかで、それは着物を着て自分の姿を美しく見せる絶好の機会だからである。試合に負けると顔に墨をつけられるか、目のまわりに墨で輪をかかれたりする。羽根が真直ぐに飛ぶように、男の子は風よ吹けと歌い、女の子は風よ止めと歌う。⁰⁸

だが面白くて、愉快なのは羽根つきだ。六人か、八人で一組になって、羽根をつく。みんな一張羅を着ている。髪は黒く、

つややかで、女の場合は、色のついたちりめんのきれとか、サングラのこうがいや、鼈甲の櫛をさしている。みんな明るくて楽しそうだ。しばらく羽根をやり取りしたあげく、羽根が地面に落ちると、しくじった方は罰としてみんなから背中をピシヤリとたたかれたり、時には墨で顔に印をつけられるという有難くない罰をうけねばならない——こんな時、ドツと笑いがわき起る！しかし、みんな順々にこれを我慢しなければならなかった。そこには、ただ喜びと陽気があるばかり。笑いはいつも人も人を魅惑するが、こんな場合の日本人の笑いは、ほかのどこで聞かれる笑いよりも、いいものだ。彼らは非常に情愛深く、親切な性質で、そういった善良な人達は、自分ら同様、他人が遊びを楽しむのを見て、うれしがらる。⁹⁹

ここに映し出されているような正月という祝祭的時空にふさわしい、華やかで躍動感あふれる羽根つき遊びの世界が、黄遵憲の描いたようなモノクロームの世界へと冷却していくのに、そう時間はかからなかったようだ。

黄遵憲は、日本の美意識を結集させたような、また日本

人のアイデンティティを表象するような正月の遊びが、真つ先に近代化の犠牲になっていく様を写実しているといえる。再度、「子どもの遊びと暮らしの歴史年表」を開いてみよう。¹⁰⁰

維新後、軍備・政治的配慮のもと、道路交通および通信網の整備が東京を中心に大規模に着手された。人力車はその製作許可（明治三年）と同時に日本中に瞬く間に普及し、翌年には郵便が開始され、明治五年には新橋・横浜間に日本最初の鉄道が開業されるなど、空間移動や情報の交信に関する感覚が一変させられる。東京にガス街灯が出現し（明治七年）、翌年マツチの製造がはじまるころには、シャツ・ズボンに靴を着用しスツキリと断髪した人々が街頭を闊歩し、ビスケットやアンパンが売りに出され、チョコレートの販売広告が新聞に掲載される（明治十一年）など、西欧文明がもたらす輝かしい未来が視覚的インパクトで人々を魅了し、東京の子どもをとり囲む衣食住環境も様相を変えてくる。

そうした動きに呼応するかのように、明治七年には子

どもの交通事故死が頻発し、児童の往還群遊が禁止され、また電線保護のために巨大な紙鳶を揚げることを取り締まる布告が出される。明治十年には、紙鳶あげ、羽根つき、独楽遊びが交通妨害になると禁止されるに至る。明治十三年の十六歳未満の少年犯罪者一七一人のうち、三分の一は東京府下のものであったように、激変する都市の深層で、子どもの生活が荒廃していったともいえる。そして、翌十四年には、小学生の路上遊びを取り締まる地域もでてきたようだ。

以上のことから推察すると、黄遵憲の「正月の遊び」は、大人と子どもが一緒になって遊び興じていた「赤ん坊の国」ニッポンに対する密かな憧憬や、古き良き過去の産物に対する甘美な感傷のレベルに留まらず、近代化の美名のもとで衰微していく文化の悲痛な叫びをも掬いとった、見事な表現だといえるのではなからうか。単なる個人的な感慨を越えて、時代の震動を鋭敏に感受した詩片だといえよう。

△定本「幼稚園」▽

こうしてみてくると、黄遵憲の原本「幼稚園」から定本「幼稚園」への改稿は、異なる視点から検討することも可能かと思われる。改めて詩を確認してみよう。



聯袂游魚逐隊嬉

捧書挾策雁行隨

打頭栗驚呼暮

悵憶兒童逃學時

生命感あふれる子どもの言動が前面に押し出されている。原本と比べて、定本の方は集団と化した子どもたちの群れが遠景から描写されているように思われる。したがって、情景が今一つ不鮮明で、残念ながら私には細部の意味がつかめない。(ぜひ、お教えいただきたい。)

子どもたちは、群れをなして泳ぐ魚のように列を連ね、袂を重ねるようにして遊んでいる。書物をささげ読み、紙(文)? を小脇にはさんで、先生のあとにつき従う。遊んでいて頭を打ちつけ、けがをして先生のもとに泣きついてくる。子どもが学ぶのをいやがって走り去っていく様子を(子どもたちの学んだあの遠い日々のことを?)、恨めしい悲しい気持ちで思い起こす。

「游魚」「逐隊」「雁行」という語の選択からも推測でき

るように、子ども一人一人の顔が見えてこないように思われる。そこからは幼稚園という制度や先生という権威に従順な、生活において受動的な集団という印象を生じさせてはいないだろうか。身長に対する頭の割合が大きいため、バランスを失って転倒し、べそをかきつつ慰めと傷の手当を求める子どもの姿は、日常的なエピソードではある。しかしその姿を、前二句で写生されていたような整然として全体の規律を乱すような不安な因子として受け取ることもでき、子どもの頼りなさ、ぎこちなさが否定的に強調されているとも読み取れよう。最終句の「悵」「逃」の語に暗いイメージを抱いてしまうのは、私の誤読ゆえだろうか。原本に比べて子どもの動きが今一つ精彩を欠き、その存在感が希薄に感じられるのは私だけだろうか。

原本から定本への改稿は、来日中に旧漢学者との親交が多く、彼らの影響が及んで、日本の新制度や西欧の文物に対して懐疑的であったのが、その後欧米諸国を周遊するにしたがい、次第にそれらを是認するようになった

ためだとされている。⁽⁴⁾「幼稚園」の詩に限っていえば、その理念や制度的側面への関心が増したために、子どもにあてられていた焦点が後退していったともいえるかもしれない。

しかし私は、黄遵憲の思想遍歴や詩作上の技術的な問題に無知であり、特に定本では最終句の意を十分に解していないため、改稿の意図についてこれ以上詮索することは避けなければならない。ただし、作品を当時の文化的・社会的背景に即して解読するこれまでの試みを通じて、黄遵憲という一人の詩人は、眼前の題材を通して時代のダイナミズムと共振する感受性を秘めていたということは理解できた。

したがって、あえて私見を述べるとするならば、原本と定本の間には横たわっている亀裂は、その後幼稚園教育という営為が露呈することになる二つの側面を暗示しているようにも思われる。幼稚園は、大人とは異なる子どもという種に特有の言動を抽出し、彼らの生命力を存分に放出させる場である。と同時に、その唱歌と遊戯の人

工楽園は、伝統的遊びの世界を駆逐して、そこで守られてきた子どもの自治権や主体性を奪い去るものでもあり、さらに制度の従属物と化した子どもは鑄型にはめられ、塊としてはじめて把握されるものであって、個としては極めて脆弱でしかない。後者こそ、黄遵憲がわざわざ記憶の淵から引き上げて、書き加えた部分だといえるよう。

私には黄遵憲がその鋭い眼光で、幼稚園という近代的措置が子どもに行使用することとなる、二つの側面を予知していたような気がしてならない。ただし、彼が最終的にどちらを肯定し、どちらを否定したのかは定かではないが…。

— 終 —

(お茶の水女子大学大学院)

〈註〉

(9) E・S・モース 石川欣一訳 『日本その日その日』 平凡

- 社東洋文庫171 一九七〇 P. 11, 47 モースは明治十年より十二年まで滞在し、その間東京帝国大学で動物学を講義し、ダーウィンの進化論を普及させた。また大森貝塚の発掘者としても有名。米国人。
- (10) チェンバレン 高梨健吉訳『日本事物史1』「子供(Child-rear)」。平凡社東洋文庫1331 一九六九 P. 117-118 チェンバレンは明治六年より三十八年まで滞在中、海軍兵学校教諭をへて東京帝国大学日本語学教授として活躍。英国出身。
- (11) オールコック 山口光朔『大君の都 下巻』岩波文庫 一九六二 P. 225-226 オールコックは日本駐在総領事公使として安政五年より元治一年まで滞在。英国人。
- (12) オールコック 前掲書 P. 225
- (13) グリフィス 山下英一訳『明治日本体験記』「第一章 子供の遊戯と競技」平凡社東洋文庫430 一九八〇 P. 152-153, 164 グリフィスは明治三年より七年まで福井藩のお雇い教師として藩校明新館で理科学を教授した。明六社会員。米国人。
- (14) ブラック ねずまさし 小池晴子訳『ヤング・ジャパン1 横浜と江戸』平凡社東洋文庫156 一九七〇 ブラックは文久元年より明治九年まで、編集者・新聞記者として滞在。『ファーフースト』、日本語新聞『日新真事誌』など発行。英国人。
- (15) グリフィス 前掲書 P. 153
- (16) 藤本浩之輔『聞き書き明治の子ども 遊びと暮らし』本邦書籍 一九八六「子どもの遊びと暮らしの歴史年表」 P. 518-523
- (17) 大田才次郎『日本児童遊戯集』復刻版 平凡社東洋文庫1 22 解説(瀬田貞二) P. 347-360
- (18) グリフィス 前掲書 P. 155-156
- (19) ブラック 前掲書 P. 264
- (20) 藤本 前掲書 P. 518-521
- (21) 『日本雑事誌』解説(実藤忠秀) P. 310-311

ある日の育児日記から

佐藤 和代

(49)

先日、義妹の家へ行ってきました。義妹の一家は、霞ヶ浦のそばにログハウスを建てて、東京から引っ越していったばかり。どんな家かな、と興味しんしんで出かけたのです。

さて、着いたとたん、圭も有も争うようにして中へ。有は、初めての家などではしばらく私にしがみついているのですが、ここは別でした。壁も床も家具も木。すべすべした手ざわり、ほのかな香り：三人のいとこと一緒に、家中ころげまわって遊び始めました。「外も広いよ、行こう」と誘っても「えー、なんで」と不満そう。そりゃそう

かもね、私だって中にいたい。だって、ふきぬけの居間に大きなストーブ、二階の子ども部屋は屋根裏部屋の雰囲気：子ども

どもの頃あこがれたハイジの家みたい。この際「子どもは外で元氣よく」なんてヤボはやめ！

以前、地方の旧家で育った友人が言っていました。「友だちが家に来た時『何して遊ぶ』って聞くと、みんな『家の中見たい』って言うの。で家中見て回ると、満足して帰ってしまうのよ：」子ども



どもって、家が好きなのですよね。さわりごこちのいい家や、隠れ家のような家ならなおさら。「またあのおうち行こうね」というのが、このところの圭と有の口ぐせなのです。



有の屋99キは、意外に力強い。圭が男の子！

お父さんの子育て

田野 直

我が家は五人家族です。私、女房、三人の男の子。

私は今年四十五歳、団塊の世代に近い年代です。ですから「男は仕事に生き、女は家を守る」という感覚が強く、私も家事は一切しません。ですけど一応、子どもたちの教育担当と言えば格好はよいのですが、子どもたちと遊んだり、子どもの成長の様子を観察して話したりすることが役割になっています。

女房は今年四十歳、俗にすぎ間世代と呼ばれています。私よりもっと年下の男と結婚していれば、団塊の世

代の夫に引っ張られることなく、もっと自由に自分の生き方が選択できたかもしれません。とにかく、女房の私や子どもに対する理解と協力にはありがたく思っています。

子どもたちは、長男は中一の「タカ」、次男は小五の「ヤス」、三男は小二の「アキ」。

長男のタカは、勉強とクラブチームのサッカーとの両立でとても頑張っています。精神的にとっても安定していて努力家です。タカを見ていて面白いことは、大好きな

サッカーで完全燃焼した時ほど勉強に集中できることです。サッカーが休みの日は、ダラダラしていてダメです。

次男のヤスは、今、これまでになく燃えています。スポーツに勉強に取り組んでいます。きっかけは先生です。五年になって若くて元気で、とてもよく子どもたちと遊んでくれる先生が担任になったからです。この先生は「ガッツ先生」と呼ばれ、ガッツを合言葉にクラスをぐいぐい引っ張っています。この先生のおかげでヤスは意欲的で積極的に変わってきて、グチ・泣き言・言い訳がだいぶなくなりました。

三男のアキ、一番下の子のせいか、いつまでたっても可愛いんです。やんちゃできかないところがあります。が、明るく伸び伸びとおおらかに育っています。

ここまで家族紹介、親バカたつぶりの家族紹介をしてきましたが、我が家の子どもたちの子育てを思い出しながら振り返っていろいろと思います。

長男のタカが幼児だったころ、初めての子育てということで、女房と話しあつて、子育てのポリシーみたいなことを決め、子育てしようとしたわけです。

ベースとしては、一つめに子育ては六歳までが勝負、何とかするのが十歳まで。これは私の本能的確信です。中学・高校で子どもたちはそれぞれ自立していくと思うのですが、自立の芽を幼児期に親子ともども理解しあつて育てていくことは大切なことであるし、後々子どもにとって大きな財産になります。

二つのベースは男の子は父親が育てなければいけないということ。これも私の本能的確信です。誤解されるところなのですが、父親でないと男の子に教えられないことが数多くあるということです。男の子の成長の曲がり角では必ずお父さんが必要になってくるはず。ポリシーの一つめは、「小さいうちから自分のことは自分でやらせよう」。これは当たり前のことですが、実際はむずかしい。今までお母さんがやってくれたのに、

自分でやるとなると、初めのうちはなかなかできない。

お母さんの方では子どもの様子を見て、なんでこんな簡単なことができないのと思います。そこでお母さんが手助けしてはダメです。じっと我慢するのです。子どもは自分の力でできたとき、「お母さん、ぼくできたよ」と嬉しそうに言ってくれるはずですよ。

ポリシーの二つめは「子どもをいじらない」。これは一つめとほとんど同じ意味です。まず子どもをベット化しないで子どもでも一人の人間として受け入れようということですよ。これもむずかしいことです。自分の子は可愛いからできるだけのことをしてあげようという親の勝手な思いが、子どもが自分のことは自分でやるという自立のチャンス奪い続けるのです。このことは子どもにとって悲惨なことになるのです。

ポリシーの三つめは、「ガンガン外遊びをさせろ」。子どもの運動神経というのは幼児の訓練で決まってくる。これも私の本能的確信です。幼児期に思いっきり体を動かした子はそれなりの基礎体力が身につく。逆に幼児期に体を動かしていない子は小学校に入って動きのバ

ランスが今一つ悪い。私自身、小学校でサッカーのコーチをよくしますが、最近の子どもたちは体は大きいですが、前後左右の動きがモタモタしていると感じます。

我が家は三人の男の子。動きのとろい子にしたくなかった。頭と体がとろいといじめの対象にされるので、元気でたくましい子にしたかった。そこで幼児期は体力をつけることに重点をおきました。

こう書いてきますと誤解を招いてしまう恐れがあるのですが、「外遊び」には体力づくりの他に大きなメリットがあります。

子どもたちが、自分のしたい遊びを選び、自分たちで考えて遊びの形を変えていくことです。そしてなにより自分の遊びにとことん熱中することです。

ボール遊び、かけっこ、鬼ごっこ、どろ遊び、花取り、木の実集め、いろいろな遊びがあり、それぞれの遊びから自分たちでルールを出しあって遊びを発展させていく、そんな遊びを繰り返しながら、知恵とか集中力とか思考力とか体力を養っていく。そこは、親が介入しな

い方が望ましい子どもたちだけの世界です。

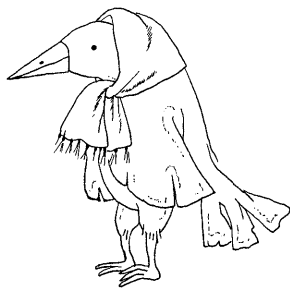
ポリシーの最後に、言葉にすると恥ずかしいのですが、
こういうのがありました。「親は子どもに対して責任は
持つが、子どもは一人の人格としてたとえ幼児であつて
も認めなければならぬ」。これは正直言つて意味不明
なのですが、親子関係は平等でなければならぬという
ような意味合いです。

子どもには子どもの世界があるはずで、子どもの世
界を否定するなり肯定するなり、初めに親が子どもの世
界を受け入れなければならぬ。そこで初めて、親子の
平等関係が生まれるんじゃないかと思うわけです。難し
くとられると困るのですが、毎日の子どもの様子をよく
観察していれば、子どもの発信しているメッセージを受
け取れるのではないかと思います。

今まで我が家の子育てのベースとポリシーについて書
いてきたのですが、次にそれでどうしたかについて話を
進めたいと思います。

まず結論から。普通の幼稚園に行かせませんでした。

しかし幼稚園らしき所へは行かせました。それは「駒沢
おひさま会」というところです。女房が四歳時の夕力を
連れて駒沢公園へ遊びに行つて、中年のおじさんが四十
人位の子どもたちと遊んでいる光景を見たらしいので
す。女房は好奇心が旺盛なもので、気になって聞きに行



き、まあとにかく夕方は入会したわけです。

「駒沢おひさま会」には、一人のプレイヤーと母親が交代で当番となって、子どもたちの面倒をみるというか保育をするわけです。

保育日は週五日、駒沢公園を拠点に世田谷プレイヤー、多摩川にも時々足を伸ばします。

保育内容は外遊び中心、雨が降れば児童館であればたまり、絵本を読んだりしますが、毎日が遠足みたいなものです。

合宿、遠出が多いのが特徴で、八月には父子合宿、十月には保育者合宿、二月にはさよなら合宿（母子合宿）、三月には多摩川でキャンプ合宿、その他年二回の登山、冬の江の島等々。

女房が駒沢公園で見た中年のおじさんがプレイヤーダーの竹内さんで、彼は団塊の世代の人間で、母親たちもまあ団塊の世代の人間が多いわけで、とにかく頑張るわけです。子どもたちにとっては、竹内さんはお父さん代わり。それに竹内さんもこたえて、子どもたちのお父

さん役を頑張ってするわけです。それで子どもたちにも頑張らせるのです。高い木に登らせたり、子どもの身長以上の高さの石垣に登らせたり、子どもといっしょになってラグビーのまねごとをしたり、とにかく子どもと結構夢中になって遊んでいました。

母親たちは母親たちでエネルギーがありましたね。やはり団塊の世代だと。

駒沢おひさま会は、自主保育です。自主とは自分たちの手で、自分たちの意志で、自分たちのお金で運営されています。大変なエネルギーが求められます。幼稚園に預ければ楽だと思えますが、あえて小学校に上がるまでは自分の手で手づくりの教育を子どもにしてあげたいという強い気持ちがあったからできたことだと感心させられます。

駒沢公園の保育は朝の散歩から始まります。駒沢公園は緑が多く、さまざまな草花があり、四季の変化があります。子どもたちはゆっくと約一時間位朝の空気をすいながら、公園内をほぼ一週散歩します。公園内にはい

くつかの児童公園があつて、そのなかから子どもたちが行きたい児童公園に行きます。そこで二時間しっかり遊びます。男の子は男の子、女の子は女の子、遊びがちがうせいか分かれます。そしてお弁当の時間、午後からもうひと遊びで保育は終わります。その後、ミーティング。プレリーダーを囲んで、当番のお母さん、子どもを迎えにきたお母さんで、今日の保育の子どもたちの様子を意見交換をします。

駒沢おひさま会のよいところの一つめは、自分の子どもが小学校にあがるまで子どもとふれあいをもち続けられることで、親子の心のキズナが強くなることです。もし幼稚園へ行かせていれば子どもの幼稚園での様子は見えづらいと思います。

二つめは、他の子どもの成長の様子が観察できるので、自分の子どもの成長の様子をより客観的に、より具体的に理解できます。このことはとても大切です。子どもの状況を正しく適切に理解していないと、子どもに無理な要求、ムダな要求をしてしまうことになります。

三つめは、他人の子どもに対しても自分の子どもに持つような愛情がわいてくることです。これはお母さんたちにとって、最も素晴らしいことだと思えます。お母さんたちの心を一回りも二回りも大きくします。駒沢おひさま会というコミュニティの団結がますます強まっています。

四つめは野外保育の素晴らしさです。子どもが自然の中にときはなたれ、自分の好きな遊びに熱中することで、自然を肌で感じたり、思いつ切り体を動かしたり、遊びの中から知恵や好奇心を養っていけることです。

話は変わりますが、駒沢おひさま会には素晴らしい年中行事があります。それは「父子合宿」です。少しふれてみたいと思います。

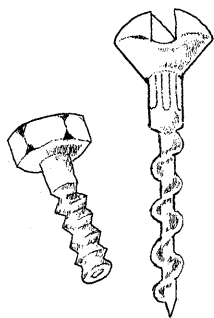
「父子合宿」とは、その名の通りお父さんと子どもたちだけの合宿です。もちろんプレリーダーも参加しますが、場所は、群馬県沼田からちょっと入った川場村の農家をお借りして、夏休み最初の土日にかけて二泊三日、すべてお父さんの手づくりの合宿です。

川場村は自然がたっぷりあって、山、緑、川と子どもたちの遊び場にもってこいです。

毎年、山歩きをしたり、川遊びをしたり、お父さんも子どもも楽しんでます。それ以上に楽しいのは、ご飯づくりもお父さんがやることです。火おこしの上手なお父さん、料理の上手なお父さん、その間子どもたちと遊ぶのが得意なお父さん、見事な分業体制で行われます。

夜のミーティングもちゃんと行われます（早い話、夜の飲み会です）。いろいろな話が出ます。子どものこと、子育てのこと、おひさま会のこと、会社・仕事のこと、話題はつきません。疲れたお父さんから子どもといっしょに寝はじめます。毎晩遅くまで飲み明かします。すると早朝から子どもが起きてきます。お父さんがちょうど深いねむりに入ったころ、子どもたちの騒々しさに起こされ、そのまま朝食の用意に入ります。食事が一回終わるたびに乾杯です。昼は、川遊びや山歩き、すいか割りもします。夜は、花火大会をちゃんとやります。結構ハードに子どもたちのために尽くします。それと夜の

ミーティング。子どもたちが楽しいと言ってくれるのがせめてものなぐさみです。お父さんはもうヨレヨレになって東京に戻ってくるのです。それでもお父さんは「合宿は良かった」と言っています。父子合宿を通じて、お父さん同士のキズナが深まったり、他の子どもたちに対しても自分の子どもと同じ様な愛着を感じはじめ



ます。ですから他の子どもの名前も平気で呼びすてす。

十月に「雑居まつり」というのがあるのですが、お母さんとは別にお父さんだけで出店を出します。ある年は前夜にザリガニを二百匹つかまえて来て、子ども相手に売ったことがあります。

秋の山登りを、毎年日曜日にしますが、父子合宿のメンバーはほとんど参加してくれません。下山後の反省会を楽しみにしている人が多いのですけど。とにかく父子合宿がおひさま会のお父さんの活動のきっかけとなり、パワーの源泉になってるように思います。おひさま会がなければなかなかできないユニークなイベントのように感じました。

我が家の三人の男の子は、このような「駒沢おひさま会」を卒会して、小学校へ入学していきましました。おひさま育ちは小学校に入って奇妙なふるまいとユニークな言動が目立つと言われていましたので、うちの子に限って

という思いはありましたが、多少の気がかりはありました。それも取りこし苦労だったようです。何の問題もなく、スムーズに小学校にとけこんでくれました。

子どもたちが小学校に入ってからは、これという子育てはしてませんが、三つのことをしています。

一つめは、スポーツを何かやらせたいという思いがあつて、サッカーをしています。土日の午後、小学校の校庭が使えるので子どもたちといっしょにサッカーをしています。夏休みにはできる限りプールに行つて泳いでいます。

二つめは、二週間子どもたちだけのキャンプに参加させていることです。このキャンプはおひさま会のプレイリーダーをやめた竹内さんが中心となり、中学生・高校生がスタッフとなつて、三十人位の小学生の面倒をみてくれます。しかし、子どもたちは自分の食事は自分でつくりますし、後かたづけも自分でします。自由時間はめいっぱい遊べます。川へ行ったり、くぎさしなどのゲームを楽しんだり、夜は毎日キャンプファイヤーです。二

週間のキャンプを終えて帰ってきますと、いちだんとたくましくなってきました。子どもたちにとって自立するよいチャンスになっているようです。それと、親の目から解放されることもある期間必要な気がしました。子どもたちはたえず親のまなざしにさらされている。保護してくれる目、批判の目、チェックされる目、とにかく親のまなざしに子どもたちの意識がいきます。そういうことから解放されて、親の存在すら忘れて、自然の中で自分のことは自分でするという体験は、子どもたちを一回りも二回りも成長させることを強く感じます。

三つめは、学校の授業参観です。これは学校の決められた日に行くのではなく、土曜日に一人の子につき年一、二回行きます。家庭での子どもたちの様子は毎日見えますからわかりますが、学校ではどんな様子かわからないので私が見に行きます。子どもたちはいやがりませんが、学校での様子を知らないわけにはいかないのでやはり行きます。

あとは、映画をよく見せます。最近の子どもたちは本

をあまり読まないの、子どもが主人公の子ども向けの映画を探します。邦画でも洋画でも子どもを題材とした映画は結構新作ででています。私が映画好きなのでそうしていますが、映画であればよく見てくれます。字幕がスーパードアでもだんだんストリーが読めてくるようになります。それが何だと言われると困るのですが、子どもたちに何かのプラスになると思ってそうしています。

以上が私の子育てですが、子どもたちにはそれぞれ自分の世界があるわけで、その世界で問題のない限り、自由にさせたいと思います。幸いにも三人とも健康に恵まれ、素直で優しい子に育っています。とてもありがたいことだと思えます。とにかく何の問題のない子を三人も授かったことに深く感謝し、今後の成長を親がじゃますることなく、しっかりと見守っていきたいと思います。とりとめのない文章になってしまいましたが、このへんで終わりにしたいと思います。

(東京・世田谷区在住)

編 集 後 記

明けましておめでとうございませす

今年もよろしくお願いいたします

新しい年を迎え、表紙、扉題字、カットとも、新しい方をお願いいたしました。今年に新たに表紙を月毎にちがう図柄をと考えております。次号も楽しみにお待ち下さい。

*

皆様のご家庭ではお正月をどの様に準備し、どう迎えていらっしゃるでしょうか。先月号から続きの二人のおばあちゃんのお正月の話によると、今も昔も変わらないのは、家族や親戚でゆっくりと過ごすお正月。大きくちがうのは、家族総出で行う暮の準備でしょうか。何しろ畳まで

厚い上等な畳と敷き替えるというのですから……。これは今のようには母親一人で頑張ってもできることではありません。生活様式ライフスタイルも変わり、お正月を「迎える」というよりも、年末年始の連休を「過ごす」という方がよいのでしょうか。今でも皆、初詣には行きます。でも神様は神社の中で、家庭から神棚はなくなりました。かまどやかわやの神様は死語の世界です。生活の中に神の居場所はなくなり、信仰と生活が結びつかないのです。いつ頃からこうなってきたのでしょうか。私も伝統的な雰囲気雰囲気の残るお正月を少しは経験している世代なのに：今、子ども達に伝えられません。大きな無くしものをしてしまったようならめたさと、無くしたもののへの心残りを感しているのは、私だけでしょうか。(K)

幼 児 の 教 育

第九十四巻 第一号

(一九九五年一月号)

定価四五〇円(本体四三七円)

発行 平成七年一月一日

編集兼発行人 本田 和子

発行所 日本幼稚園協会

〒112東京都文京区大塚二一一一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

〒108東京都港区三田五一二一一

発売所 株式会社 フレーベル館

〒113東京都文京区本駒込

六一四一九

☎〇三三五三九五五六〇四

振替 〇〇一九〇一二一九六四〇

☆ 本誌ご購入のご注文は発売所フレー

ベル館にお願いします。

手づくり保育シリーズ⑥

環境構成 赤ちゃんグッズ



- 0・1・2歳児のための保育環境づくりに役立つグッズ。
- 保母さんのアイデアが生きている、赤ちゃんにやさしいグッズ。
- 身近な素材を生かして、赤ちゃんの遊びや生活に彩りをそえ、発達をうながす工夫のあるグッズ。

八王子保育研究会・著

B5判・96頁・定価2,200円(本体2,136円)

手づくり保育シリーズ① **歌ってだいすき** -湯浅とんぼの遊びうた傑作選-

湯浅とんぼ・著 B5判・104頁・定価2,200円(本体2,136円)

手づくり保育シリーズ② **布で作ったアイデアおもちゃ**

鈴木美也子・著 B5判・96頁・定価2,200円(本体2,136円)

手づくり保育シリーズ③ **思い出プレゼント**

島田明美・著 B5判・96頁・定価2,200円(本体2,136円)

手づくり保育シリーズ④ **保育に生かす55の生活アイデア**

ほいく♡けんきゅうかい・著 B5判・96頁・定価2,200円(本体2,136円)

手づくり保育シリーズ⑤ **劇あそびがとびだした**

花輪 充・著 B5判・104頁・定価2,200円(本体2,136円)

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。

ザ・ペープサート



見せるだけのペープサートとは異なり、子どもと対話しながらストーリーを進めていく新しい形式の紙人形劇の演じ方と人形の作り方図説の解説書です。子どもでも演じることができるやさしい話の脚本もついていて、子どもの表現意欲を高めるのに役立つ保育資料です。

阿部 恵・著

B5変型判・80頁・定価2,500円(本体2,427円)

ザ・テーブルシアター



人形を持ってテーブルをかこめばそこが人形劇場に早変わり。人形はどこでも入手できるてぶくろが素材で、作り方もやさしくデザインされています。脚本は保育者と子どもとの対話为中心で、クイズ、歌、会話を盛り込んだストーリー展開ができるように作られていて、保育現場ですぐ活用できます。

「ひかりちゃんのおにわ」「てぶくろが化けたとき」「プレーメンの音楽隊」「さるとかにのおはなし」の4つの話。脚本と演じ方の解説書です。人形の作り方つきです。

長縄泰子・都丸つや子/共著

B5変型判・80頁・定価2,500円(本体2,427円)

ザ・エプロンシアター①

- ①「はらぺこ かいじゅう」
- ②「おふるに はいろう」
- ③「ねずみの すもろ」

ザ・エプロンシアター②

- ①「まる さんかく しかくなあに？」
- ②「うさぎさん インフルエンザ」
- ③「大きな かぶ」

ザ・エプロンシアター③

- ①「みんな ねんね」
- ②「りんごの木」
- ③「せんたくしましょう」
- ④「どうぶつ いっぱい」

中谷真弓・著 B5変型判・80頁・各定価2,500円(本体2,427円)

ザ・パネルシアター①

- ①「三枚のおふだ」
- ②「ころころまでまで」
- ③「おばけの ひとつごちゃん」

ザ・パネルシアター②

- ①「ももたろう」
- ②「おおきくになったらね」
- ③「ハッピーバースデー おつきさま」

ザ・パネルシアター③

- ①「ひつじかいとおおかみ」
- ②「たまごがころん あれあれノ」
- ③「あいうえおうじ」

阿部 恵・著 B5変型判・80頁・各定価2,500円(本体2,427円)